第19図　美乃利遺跡周辺の微地形

第20図　野口段丘崖

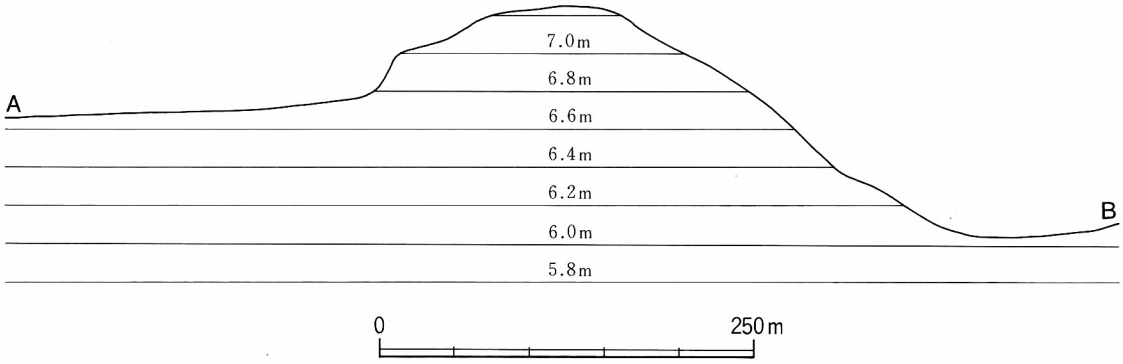
面を中心に微地形の復原を試みたい。

1/2,500スケール

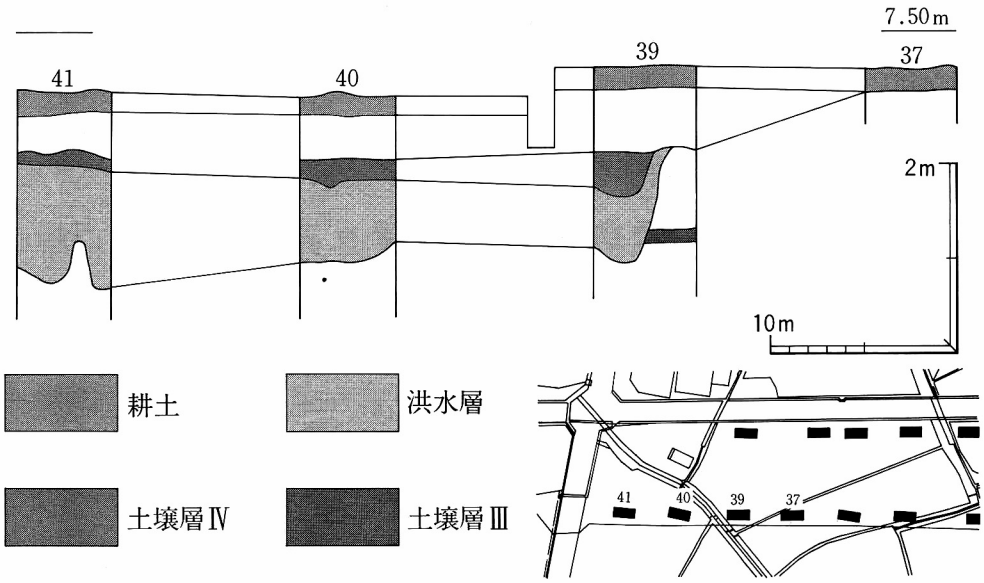
1/2,500都市計画図をベースに10㎝等高線を復原したのが第19図である。これによると、当遺跡が立地するあたりにほぼ南北方向に舌状に張り出す微高地を認めることができる。この微高地は、後述するように埋没自然堤防を反映したものである。主軸方向で約800ｍ、その直交方向で約300ｍを測り、西側は用水路を中心とした谷状を呈し、東側も川こそ流れていないが大きな谷地形となっている。因みに、微高地中央部（尾根部）を基準とした比高差は西側で約50㎝、東側で約1.2ｍと、東側に大きく落ち込んでいる。

高橋　学の地形分類によると、当遺跡は完新世段丘Ⅰ面自然堤防帯後背湿地に位置している。そして、今回の調査区の北西側、Ⅴ区の北西側の用水路は、埋没する完新世段丘Ⅰ面の段丘崖と平面的に一致するものと推定される。当微高地の西側の等高線がかなり乱れているのは、段丘崖以西が中世以降の氾濫原となっているためと考えられる。

ただし、この埋没段丘は完全には埋没しておらず、現地表面の観察において、用水路を挟んで約30㎝の比高差となって現れている（第23図）。



第21図　微高地横断図



第22図　確認調査柱状図

また、上記のことは、確認調査の結果（第22図）においても認めることができる。つまり、この用水路を挟んで南東側（トレンチNo.37・No.39）と北西側（トレンチNo.40・No.41）とでは層序が大きく異なり、北西側のトレンチは洪水による堆積層からなり、南東側の土層を切る形で堆積している。

小　字

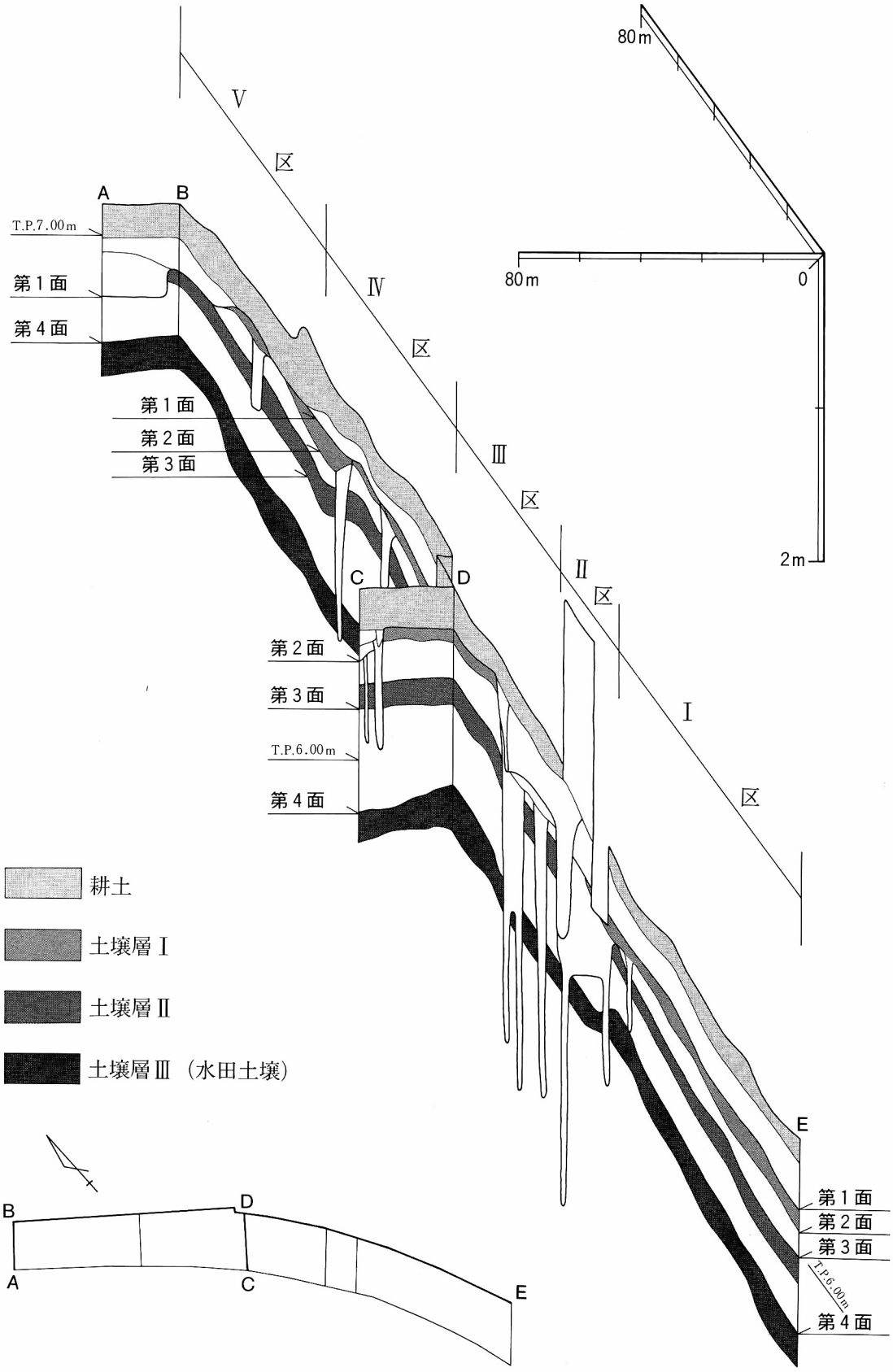
さらに、第11図を参照すると、この用水路が小字境となっている。そして、北西側の小字は「古河内」と旧河道を表す小字名となっており、確認調査の結果と対応する。

調査位置

次に上記の微高地上における調査位置をみてみたい。第10図によると、調査区は南東（Ⅰ区）から北西方向（Ⅴ区）に緩やかにカーブしているが、概ね微高地の縁辺部（Ⅰ区）から尾根部（Ⅴ区）にかけて設定されていることがわかる。

つまり、直線的ではないものの、おおむね微高地の主軸方向に対して直交する方向に調査区が設定されているものと理解できる。よって、今回の調査は、結果として、美乃利遺跡が立地する舌状に張り出す微高地に対して直交する方向、すなわち紡錘形をなすと推定

第23図　完新世段丘崖



第24図　美乃利遺跡基本土層図

される集落を横断するようにトレンチを設定し、調査を行った形となっている。

1/1,000スケール

上記のことは、調査区周辺部を１/1,000の工事用図面をベースとした10cm等高線図（第11図）においても明確である。これによると、Ⅳ区からⅤ区にかけてが微高地の尾根部にあたり、Ⅰ区へ行くほど谷部へ近づいていく。

現地表面の標高は、Ⅳ区からⅤ区にかけての最高部で7.19ｍ、Ⅰ区南東部で6.74ｍと、45cmの比高差が認められる。

３．基本層序と遺構の検出

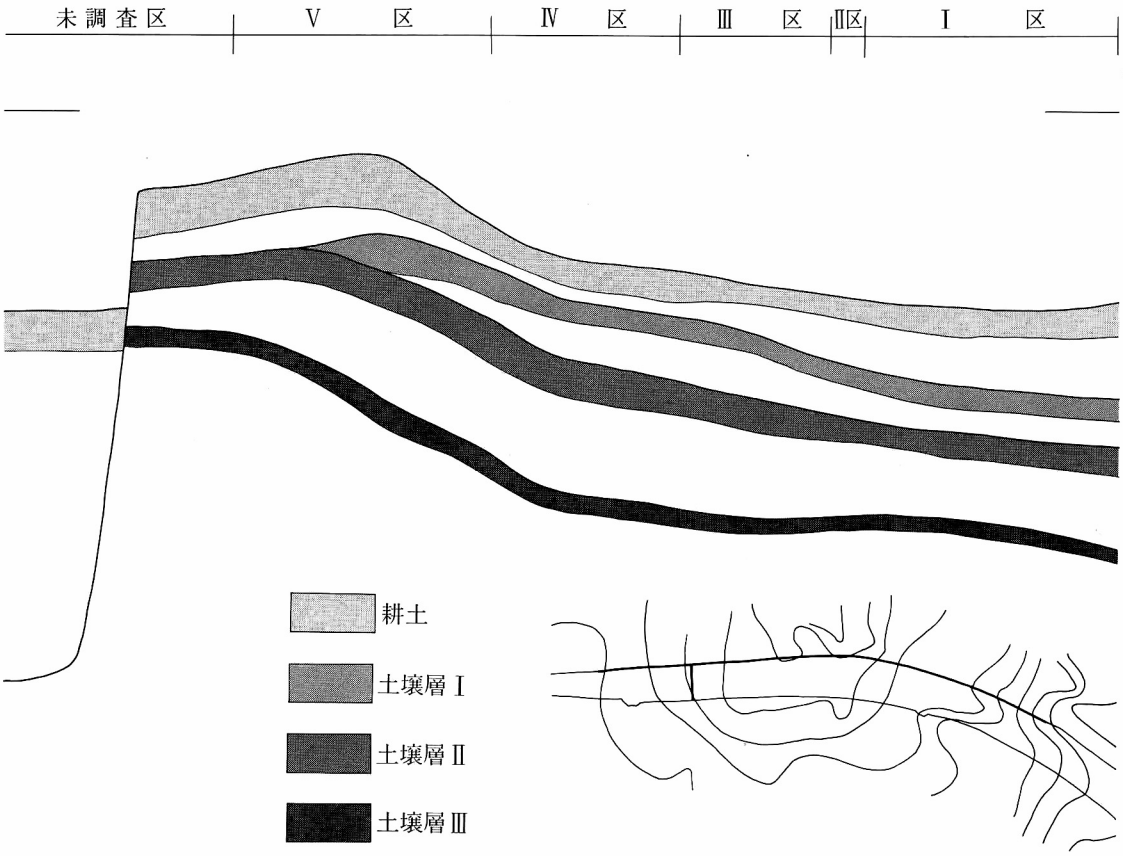
土壌層

確認調査において、５層～12層の旧表土層（土壌層）を確認した。このなかで、特に土壌化が顕著で、かつ、確認調査においてその上面あるいは下面において遺構の検出が可能と判断した土壌層を３層確認した（第24図）。上から「土壌層Ⅰ」「土壌層Ⅱ」「土壌層Ⅲ」と呼称する。

これらの土壌層は、基本的にⅠ区からⅤ区を通して共通して認められる層である。そして、第24図をもとにこれらの土壌層のみを抽出したのが第25図である。これにより、各土壌層とも、Ⅴ区のほぼ中央部に向かって各土壌層のレベルが高くなる傾向を読み取ることができる。そして、その傾向は第19図でみたコンター図と一致する。

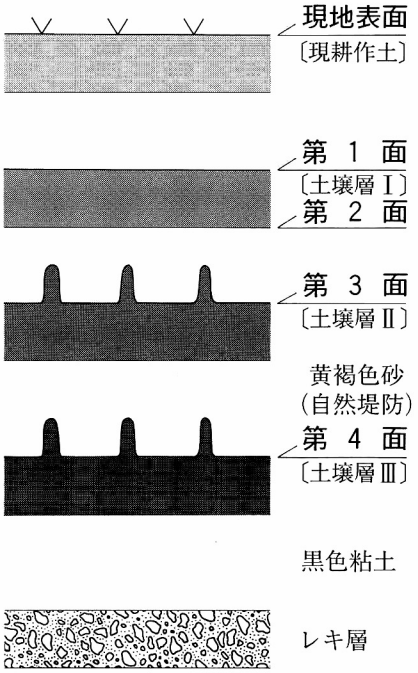
埋没自然堤防

これは、土壌層Ⅲの下層にいくつかの中州を形成する礫層があり、この中州間の谷を埋めるように自然堤防が形成されていることによるものと考えられる。そして、この埋没自然堤防が、第19図で認められた微高地の基礎となっているものと考えられる。その後、こ



第25図　土壌層と埋没段丘

の埋没自然堤防の縁辺部を中心に埋没することにより、現地表面で観察できるような平坦な地形となってきている。このため、Ⅰ区（南東）へいくほど土壌層間の間層も厚くなる傾向が認められる。逆にⅤ区においては、土壌層Ⅰと土壌層Ⅱの間層がなくなり、西端部では両層の分層が困難となっている。さらに、一部では土壌層Ⅰ自体が削平を受けることにより平坦化している。



第26図　基本土層図

水田土壌　なお、上記３層の土壌層のうち土壌層Ⅱと土壌層Ⅲについては、その層相から水田土壌であるとの判断にいたった。調査後に、各層の土壌資料をサンプリングしプラントオパール分析を行い、水田土壌との結果がでている（第４章第８節）。

遺構の検出　ところで、土壌層はある時期の地表面を表わすものである。したがって、基本的には土壌層の上面において人間の営みが行われていたものと考えるべき、つまりこの上面で遺構を検出してしかるべきである。しかし、遺構の検出は色調の識別を基本とするため、当遺跡では土壌層上面での土壌化した埋土を含む遺構の検出は困難である。そこで、遺構の検出にあたっては、土壌化した部分（土壌層）を除去し、明色となった面（土壌層の下面）で遺構の検出をおこなった。したがって、この面は遺構を検出した任意の面であって、厳密には当時の地表面を意味するものではない。

ただし、埋土が土壌層そのものの色調と明らかに異なる場合はこの限りではなく、土壌層上面における遺構検出も可能である。後述するように、当遺跡においても、このような条件で遺構を検出している。第１面がその該当例である。

水田土壌　また、水田土壌層についても、土壌層の上面で検出しなければ調査にならない。水田土壌層と判断した土壌層Ⅱと土壌層Ⅲについては、確認調査の結果、上面での調査が可能との結論に至り、水田面の検出をおこなった。

基本層序　以上の基本認識のもと、３層の土壌層の上面あるいは下面で遺構の検出を行った。具体的には、土壌層Ⅰの上面と下面、土壌層Ⅱの上面もしくは下面、土壌層Ⅲの上面の４面に分けて調査を行った（第26図）。そして、この４面は各地区に共通するものである。

なお、同じ検出面においても埋土の違いあるいは遺構の性格の違いから地区によっては２回に分けて調査を行った面がある。これらの面については、各地区に共通する「第１面」「第２面」「第３面」「第４面」の呼称の後に、「第１面(1)」「第１面(2)」のように枝番を付けて呼称することにする。

各土壌層と遺構検出面との関係は以下の通りである。

第１面　土壌層Ⅰの上面で検出した面である。水田土壌層ではないが、黒褐色系の土壌層に対して埋土が灰色系であることから遺構を検出することができた。Ⅱ区～Ⅳ区においては、埋土の相違・遺構相互の切り合い関係などをもとに２回に分けて調査を行った。

第２面　土壌層Ⅰの下面で検出した面である。遺構の埋土が土壌層Ⅰと同じく黒褐色系を呈するため土壌層Ⅰの上面での検出が不可能であると判断し、その下面で遺構を検出した。

第３面　土壌層Ⅱの上面で検出した面である。当土壌層は、Ⅰ区からⅢ区にかけては水田土壌であり、かつこの土壌層の上に黄褐色系の洪水砂が堆積していたため、当層上面での検出が可能となった。ただし、Ⅲ区の一部およびⅣ区・Ⅴ区においては水田土壌から一般的な土壌層に変化しているため、土壌層の下面で遺構の検出をおこなった。また、Ⅰ区においては２回に分けて（第３面(1)・第３面(2)）調査をおこなっている。

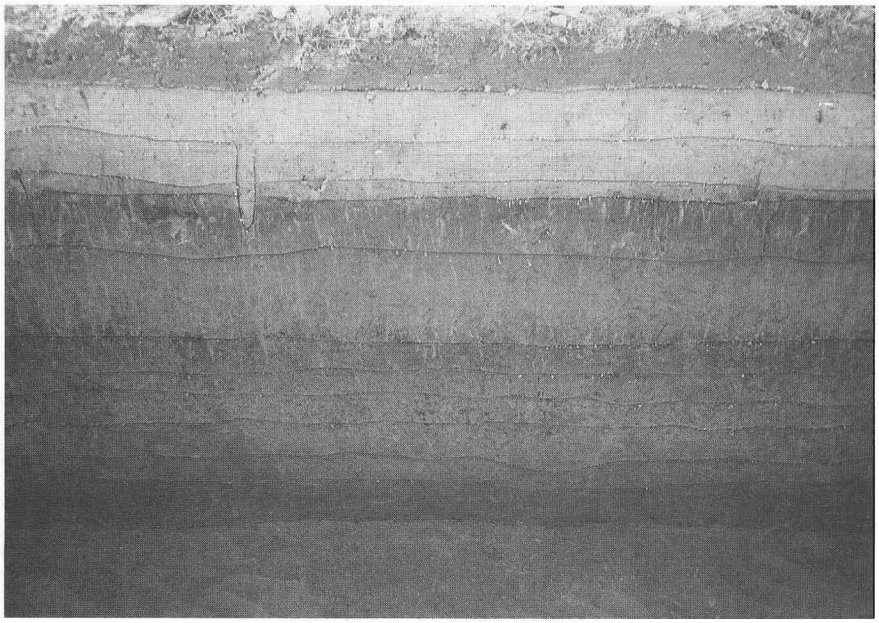
第４面　土壌層Ⅲの上面で検出した面である。当土壌層についても、土壌層Ⅱと同様、水田土壌であり、かつ当層の上に黄褐色系の洪水砂が堆積していたことから、当層上面での検出が可能となった。

なお、より具体的な層序・土壌層の形成時期等については、各地区ごとに説明する。

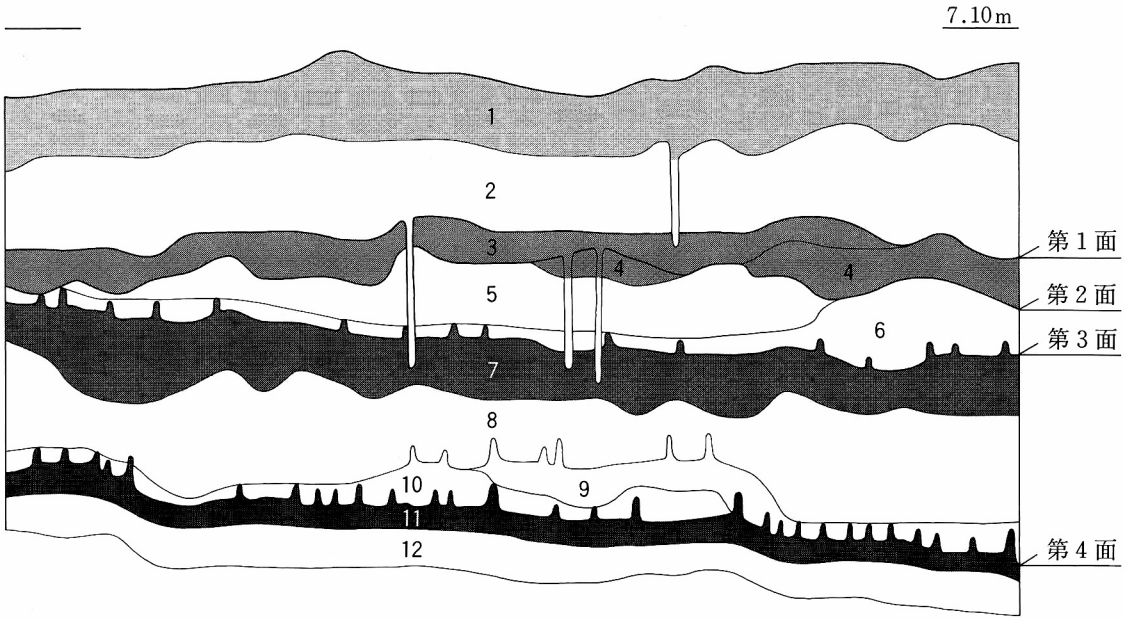
〔注〕

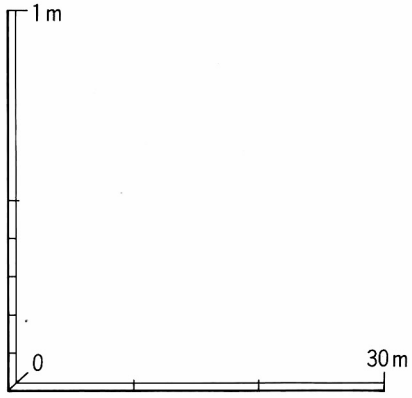
(1)　田中眞吾「播磨の地形の成り立ちと特色」『播磨の地理　自然編』　田中眞吾編著　神戸新聞総合出版センター　1994

(2)　田中眞吾「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史　第一巻』　兵庫県加古川市　1989



第27図　美乃利遺跡基本土層





1．耕作土
2．シルト質極細砂（10Y 7/1　灰白）
　とシルト質極細砂（2.5Y 7/6　明黄褐）の互層
3．極細砂質シルト（土壌層Ⅰ）　10YR 6/1　褐灰
4．シルト質極細砂（土壌層Ⅰ）　10YR 7/1　灰白
5．シルト質極細砂（土壌層）　10YR 7/1　灰白
6．シルト質極細砂　10YR 7/1　灰白
7．シルト質極細砂（土壌層Ⅱ）　10YR 3/1　黒褐
8．シルト質極細砂　10YR 7/1　灰白
9．シルト質細砂（水田土壌）　2.5Y 7/3　浅黄
10．シルト質極細砂（水田土壌）　2.5Y 7/1　灰白
11．シルト質粘土（土壌層Ⅲ）　N 4/0　灰
12．粘土（土壌層）　N 3/0　暗灰

耕土　土壌層Ⅰ　土壌層Ⅱ　土壌層Ⅲ（水田土壌）

第28図　Ⅰ区基本土層

第２節　Ⅰ区の調査

１．調査の概要

(1) 基本層序

前節で報告した当遺跡全体に共通する基本層序が、当調査区全域で認められる（第28図）。しかし、微高地の傾斜地に位置するため、全体的に南東側へ低くなる傾向にある。

上から、現耕作土、土壌層Ⅰ、土壌層Ⅱ、土壌層Ⅲと４層の土壌層が確認でき、各土壌層間に間層が顕著に認められる。

現耕作土　当遺跡の現地表面をなす水田土壌層である。

現耕作土と下層の土壌層Ⅰの間は、灰白色シルト質極細砂と明黄褐色シルト質極細砂の互層となっている。前者は水田土壌層、後者はその床土にあたり、両者の互層は多い箇所で５帯認められる。

土壌層Ⅰ　細かく観察すると、褐灰色極細砂質シルトと灰色シルト質極細砂の２層からなる。後者は南側の一部に限られるもので、層位的に前者の下層になる。断面観察においては両層を識別できたが、平面的には明確に識別できなかった。しかし、断面観察において後者の層の上面から切り込む遺構は認められなかった。

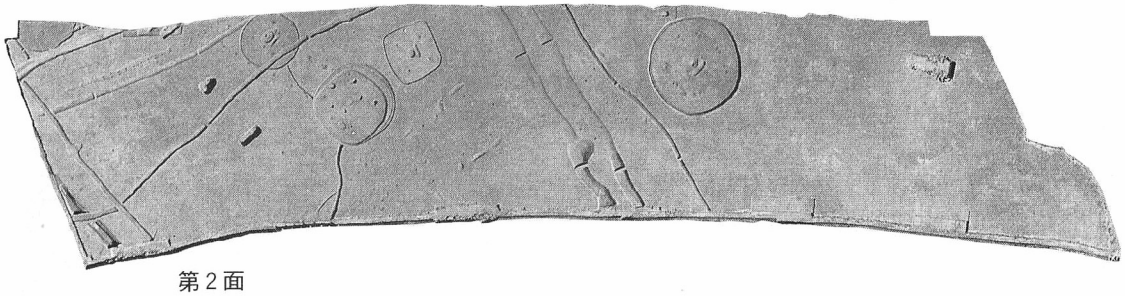
土壌層Ⅰの下層は、灰白色シルト質極細砂が２層認められる（第28図　５層・６層）。前者は、基本的には土壌層Ⅰと同一堆積によるもので、若干土壌化が認められる。後者は全く土壌化が認められない層で、洪水に伴うものと考えられる。当層は北側ほど薄くなっている。

土壌層Ⅱ　黒褐色シルト質極細砂１層からなる水田土壌層である。

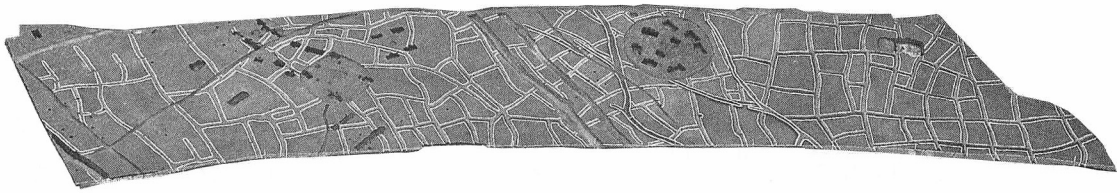
土壌層Ⅱの下層は、上から灰白色シルト質極細砂、浅黄色シルト質細砂、灰白色シルト質極細砂の３層からなる。灰白色シルト質極細砂は、土壌層Ⅱと同一堆積からなる層である。浅黄色シルト質細砂と灰白色シルト質極細砂の両層は水田土壌層で、土層観察では畦畔状の高まりを確認することができた。ただし、両層は比較的広範囲に認められるものの、畦畔状の高まりが認められるのは当調査区中央部に限られ、面的には検出できなかった。

土壌層Ⅲ　灰色シルト質粘土１層からなる水田土壌層である。この下層は暗灰色粘土である。当層についても、顕著な撹乱が認められるが、水田土壌ではなく、ヨシ類等によるものと考えられる。なお、部分的にではあるが、当層の下約１ｍ～1.5ｍでは礫層を確認している。

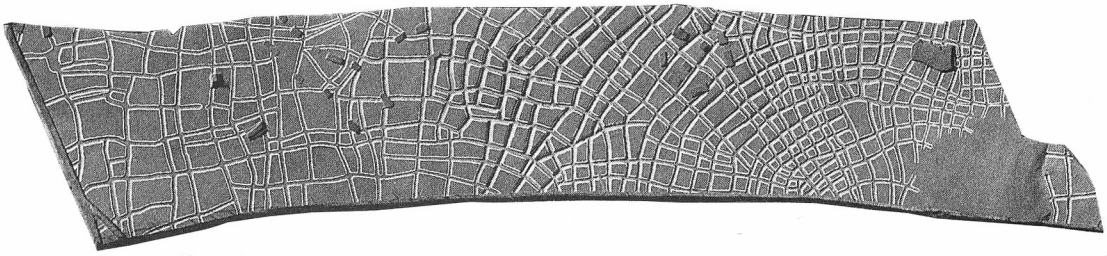
第１面



第２面



第３面



第４面

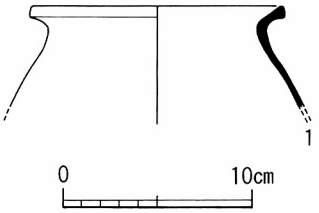
第29図　Ⅰ区の遺構

⑵　土壌層と遺構の検出

大きく、第１面から第４面の４面にわたって遺構を検出している。

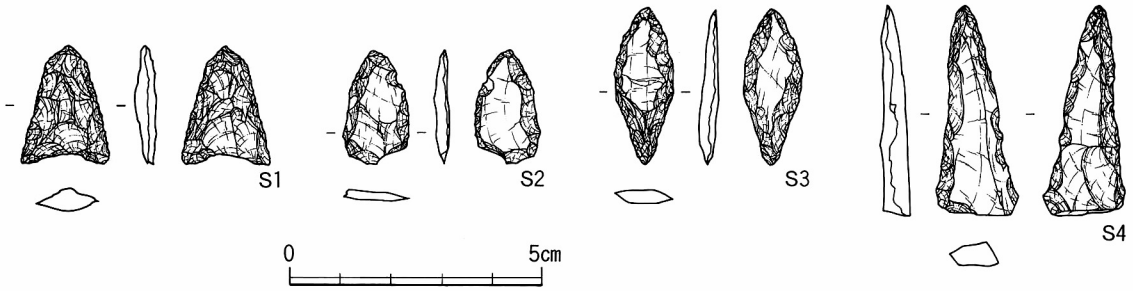
第１面　土壌層Ⅰの上面で検出した遺構で、その埋土は灰色系を呈する。主な遺構は、中世後半以降と考えられる鋤溝を検出している。

第２面　土壌層Ⅰを掘削し土壌化していない灰色シルト質極細砂（第28図　５層・６層）の上面で検出している。検出した遺構のなかで判断可能な時期は、弥生時代中期後半・弥生時代後期・古墳時代前半・奈良時代である。



第30図　Ⅰ区第２面出土土器

当面を検出する際に出土した土器のなかにおいてもで最も古く位置付けられるのも弥生時代中期の甕（第30図－１）である。また、石器（第31図Ｓ１～Ｓ４）についても、ほぼ当該期を示すものである。したがって、当遺構面に伴う遺構は、弥生時代中期以降と考えられる。

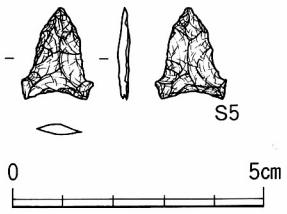


第31図　Ⅰ区第２面出土石器

第３面　土壌層Ⅰの下層にある若干土壌化した灰白色シルト質極細砂を掘削したレベルで検出している。当初は、次の第３面⑵の土壌層Ⅱ上面にあたる水田畦畔を検出するため、土壌層より若干上面で平面的に調査した際に、偶然溝状の遺構を確認した。このため、この面を第３面⑴とし、この面で畦畔を確認した土壌層Ⅱ上面を第３面⑵とする。

第３面⑴においては、弥生時代前期の溝を数条検出している。埋土内から若干の弥生前期の土器が出土しており、これが、後述する第３面⑵・第４面の水田跡の時期を論ずる根拠となっている。

第３面⑵では水田跡を検出した。前述したように、弥生時代前期の溝を検出した第３面⑴より下層であることから、弥生時代前期と判断した。また、当遺構面を検出する際に出土した石器（第32図－Ｓ５）の形態からも、首肯できるものと考えられる。小区画水田に分類されるものであるが、平面形は方形を指向するものの、後述する第４面検出の水田跡と比較すると、一定ではない。



第32図　Ⅰ区第３面出土石器

第４面　土壌層Ⅲの上面で検出している。第３面⑵同様、水田跡を検出した。第３面⑵とは異なり、平面方形を指向したかなり整然とした小区画水田である。弥生時代前期と判断した第３面⑵の水田跡より古いことは確実であるが、より細かな時期の特定は困難である。

２．第１面の調査

(1)　概　要（図版１　写真図版３）

当遺構面で検出した遺構は、鋤溝に限られる。

(2)　調査の結果

鋤　溝

検出状況　Ⅰ区第１面全域で小規模な短い溝が検出され、鋤による耕作跡（鋤溝）と考えた。

形状・規模　溝の方向は北西から南東にそろっており、N47°Wを指向する。長さは50㎝～５ｍとばらつきがある。幅は検出面で20～30㎝、溝底で５～10㎝を測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは３～６㎝である。

埋土は灰白色の洪水砂である。若干の土器・石器が包含されていた。

出土遺物　土器の小片が出土している。

時　期　出土遺物から、中世後半以降と考えられる。

第33図　Ⅰ区第１面

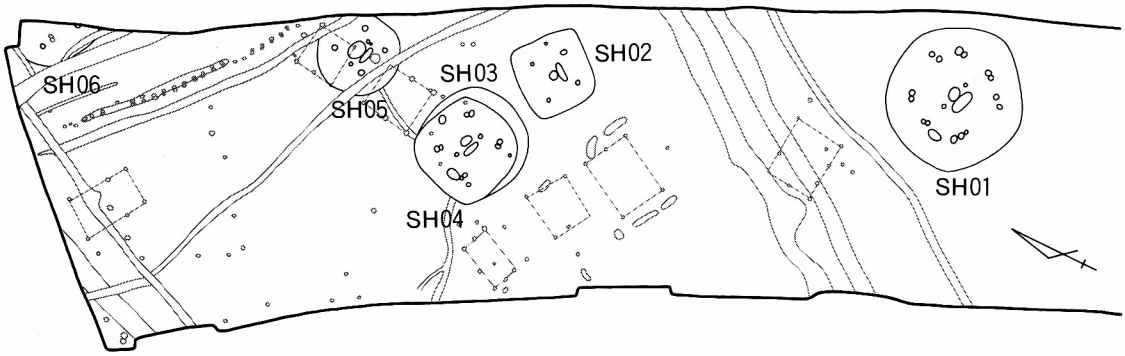
３．第２面の調査

(1)　概　要（図版２　写真図版４・５）

概　要　第２面で検出された遺構は、円形の住居跡５棟（内１棟は建て替えを含む）、方形の住居跡１棟、掘立柱建物跡６棟、土坑７基、溝14本である。最も大型の住居跡であるSH01より南に遺構は確認されていない。特に竪穴住居SH02～SH05や掘立柱建物SB02～SB06は近接した位置にあり、この付近に遺構が集中している。また、掘立柱建物SB02の両脇には、建物に付随するように土坑SK01・SK02・SK05・SK06が検出されている。また、溝は北東から南西に流れるものと、北西から南東に流れるものとの２通りが認められる。

この面で検出された遺構の時期は、弥生時代中期から奈良時代にかけてである。

第34図　Ⅰ区第２面



第35図　Ⅰ区第２面　住居跡

(2)　調査の結果

Ⅰ．住居跡

ＳＨ０１（図版３～５　写真図版６・７・109・110・174）

検出状況　Ⅰ区の一番南側に単独に存在する（第35図）。遺構は完存する。主柱穴が２個ずつ対で存在することから１回の建替えがあったと思われるが、周壁溝は部分的に二重になるだけで、中央土坑は共通していたようである。

形状・規模　平面形は円形を呈する。中央土坑の方位はＮ71°Ｗである。

規模は径8.30ｍである。検出面から床面までの深さは22㎝で、床面の標高は6.00ｍである。検出した床面積は58.19㎡を測る。

埋　土　中央土坑の部分を除いて、３層にわたって堆積している。

上層から順に、１層が淡黒褐色シルト混じり極細砂、２層が暗黒褐色極細砂混じりシルトで炭や土器をやや多く含み、３層が黄褐色シルト混じり極細砂で、周壁溝には暗灰色シルト質極細砂ないし暗黒褐色極細砂質シルトが堆積している。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑と土坑１基が検出された。

柱　穴　合計17穴検出しているが、そのうち14穴は２本ずつ７組の対になっており、多少歪な形であるものの、７本柱の主柱穴が考えられる。Ｐ１とＰ８、Ｐ４とＰ11、Ｐ５とＰ12、Ｐ７とＰ14は切り合いにより前後関係が明らかであるが、Ｐ２とＰ９、Ｐ３とＰ10、Ｐ６とＰ13は不明であり、組み合わせは位置より推定したが、逆転している可能性がある。

Ｐ１は掘り方径40㎝、柱痕径18㎝、床面からの深さ34㎝、Ｐ２は掘り方径38㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ40㎝、Ｐ３は掘り方径42㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ45㎝、Ｐ４は掘り方径46㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ34㎝、Ｐ５は掘り方径46㎝、柱痕径18㎝、床面からの深さ50㎝、Ｐ６は掘り方径40㎝、柱痕径18㎝、床面からの深さ40㎝、Ｐ７は掘り方径42㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ43㎝、Ｐ８は掘り方径40㎝、柱痕径14㎝、床面からの深さ38㎝、Ｐ９は掘り方径42㎝、柱痕径22㎝、床面からの深さ15㎝、Ｐ10は掘り方径44㎝、柱痕径24㎝、床面からの深さ56㎝、Ｐ11は掘り方径51㎝、柱痕径22㎝、床面からの深さ35㎝、Ｐ12は掘り方径45㎝、柱痕径14㎝、床面からの深さ26㎝、Ｐ13は掘り方径43㎝、柱痕径17㎝、床面からの深さ13㎝、Ｐ14は掘り方径46㎝、柱痕径19㎝、床面からの深さ10㎝を測る。以上の14穴が主柱穴を構成しているものと考えているものである。

主柱穴以外にも３穴の柱穴が検出されている。Ｐ15はＰ13・Ｐ14の近くにあり、掘り方径49㎝、柱痕径21㎝、床面からの深さ24㎝を測る。Ｐ16・Ｐ17は中央土坑Ａの東西の両脇にあり、その方向は中央土坑Ｂと一致している。Ｐ16は掘り方径32㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ33㎝、Ｐ17は掘り方径36㎝、柱痕径18㎝、床面からの深さ40㎝を測る。

主柱間の距離はＰ６・Ｐ７間が最も広く3.1ｍ、ついでＰ２・Ｐ３間が2.8ｍである。他はおよそ2.4ｍで、もっとも短いＰ５・Ｐ６間で1.7ｍである。

周壁溝　周壁溝は全周している。床面での幅22～45㎝、底の幅５～15㎝、検出面からの深さ22～27㎝、床面からの深さ２～６㎝を測る。

中央土坑　土坑Ａ・土坑Ｂの両方認められ、柱穴が東側と西側の２か所に認められる。

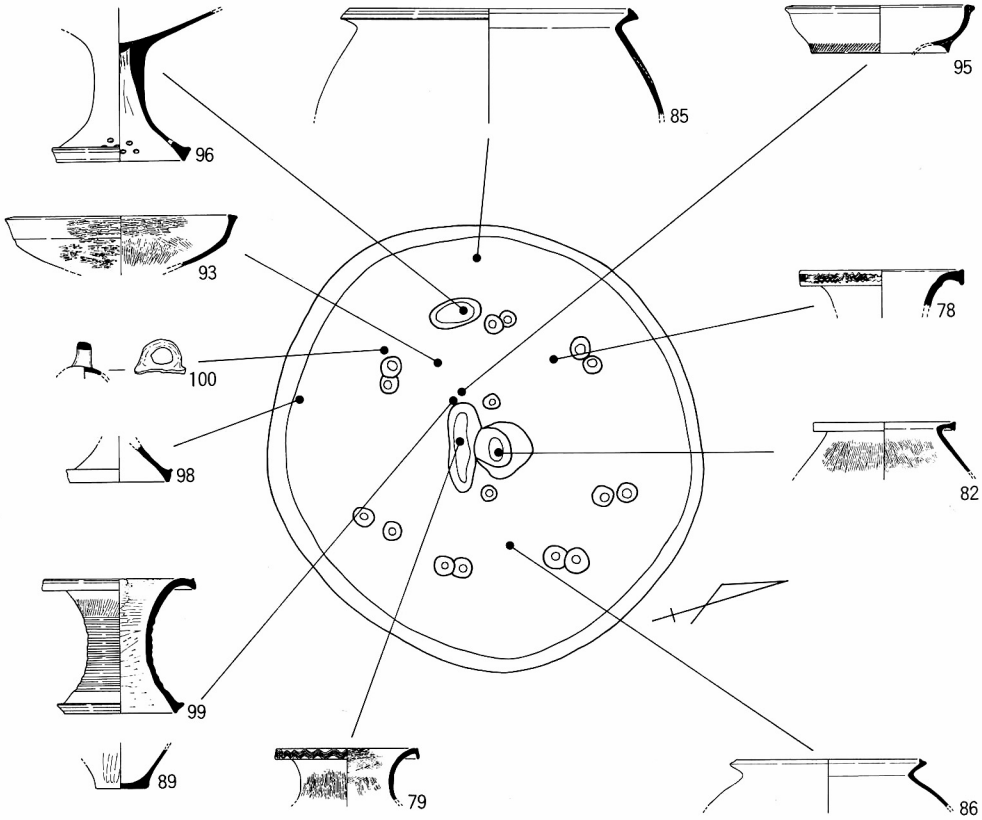
土坑Ａ　土坑Ｂの南側に位置しており、平面形は細長い楕円形で、規模は長さ182㎝、幅70㎝、深さ12㎝を測り、面積は1.1㎡である。長軸の方向はＮ72°Ｗである。埋土は２層に分かれ、上層は中央土坑Ｂと同じ覆土で、下層は黒色の砂質シルトであり、炭や土器、灰らしきものを含んでいる。

土坑Ｂ　平面形はほぼ円形で、規模は直径115～125㎝、深さ30㎝を測り、面積は1.4㎡である。埋土は２層に分かれ、上層が暗灰黄色の砂混じりシルトで、下層が黒褐色砂質シルトであり、炭や土器、灰らしきものを含んでいる。

この周辺から土器が集中して出土している。

中央土坑Ａ・Ｂの面積は2.02㎡で、対床面積比は3.5％である。

土　坑　主柱穴Ｐ８とＰ15の間にあり、規模は長さ1.08㎝、幅59㎝、深さ10㎝を測り、面積は0.6㎡である。埋土は１層で、黒褐色砂混じりシルトである。



第36図　SH01土器出土位置

出土遺物　土器・石器が出土している（第36図）。

土　器　壺・甕・鉢・高坏・複合土器・器台他の各器種が出土している。

壺　広口壺の口縁部（77～79）と体部（80）および底部片（81）からなる。

77～79はほぼ同タイプに分類される。ただし、77と79は口縁端部を下方に拡張するのに対して、78は上下方向に拡張する。78の口縁端部に7条の、79の口縁端部に6条の櫛描波状紋がそれぞれ描かれている。また、78は口頸部外面をナデ調整により仕上げ、内面にはわずかにハケ調整の痕跡が観察できる。77は、内外面とも磨滅のため観察できない。

80は体部上半に、上から2帯の櫛描波状紋、1帯の櫛描直線紋、1帯の櫛描波状紋の順に描かれている。波状紋については9条、直線紋については7条を1帯としている。また、頸部の上端部に突帯の痕跡がわずかに認められる。

底部片の81は、外面をヘラ磨きにより、内面をナデ調整により仕上げられている。

甕　口縁部片（82～87）と底部片（88・89）が出土している。

口縁部については、法量的に、大型・中型・小型の3タイプが認められるが、基本形態は同じである。また、調整法については、82の内外面のハケ調整痕を観察できる以外は、磨滅のため観察できない。

底部の88については、外面をハケ調整、内面をヘラナデ調整により仕上げられている。89については、外面をヘラ磨きにより仕上げられているが、形態的に甕形土器に分類した。内面の調整は磨滅のため観察できない。

鉢　90と91の2個体を図化した。いずれも有孔鉢に分類されるものである。

90は内外面とも指オサエにより仕上げられ、底部中央に径2.2㎝の穿孔が認められる。焼成前に穿孔されたのもと考えられる。91についても、底部中央に径2.6㎝の穿孔が認められる。当個体についても、焼成前に穿孔されている。ただし、この土器については甕に分類される可能性も否定できない。

高　坏　坏部（92～94）と脚部（96～98）が出土している。

杯部については、調整痕を観察できたものについてはヘラ磨きにより仕上げられている。93の体部内面以外は、すべて横方向に仕上げられている。

複合土器　95の1個体である。口縁部のみ残存する。口縁端部と口縁部から体部への変換部の突帯部をヨコナデ調整により仕上げられているが、他は磨滅のため観察できない。突帯外面には斜方向の刻み目が認められる。

器　台　99の1個体である。口縁部内外面をナデ調整、口縁部～体部上半底面をヘラ磨きにより仕上げられている。

他　100の釣手状の土器片が出土している。和泉の池上遺跡等で出土する釣鐘形の蛸壺と考えられる。

石　器　S34～S42はサヌカイト製の石鏃である。S34・S36は平基式で、S37は凸基式、S38～S41は有茎式である。S34は幅1.5㎝、長さ2.15㎝、厚さ0.25㎝、重さ0.9ｇ。やや幅が広く薄いタイプで、当遺跡では標準的な平基式である。S36は幅1.3㎝、長さ2.7㎝、厚さ0.35㎝、重さ0.8ｇ。幅が狭く長いタイプである。S35は欠損のため元の形は不明であるが、五角形に近い他に例のないタイプである。S37は幅1.25㎝、長さ3.4㎝、重さ0.8ｇ。

やや大きめで、厚さも0.5㎝と厚い。Ｓ38～Ｓ41は幅が1.45～1.8㎝、長さ3.25㎝前後、厚さ0.45～0.7㎝、重さ1.7～2.7ｇ。やや広く厚手のタイプで、茎の部分の形状も似通った一群で、美乃利遺跡でもこの住居跡以外にこのタイプの有茎式はみとめられない。Ｓ42も欠損のため原形は不明であるが、かなり大型の有茎式の鏃になるものと思われる。

Ｓ43は石槍の基部の破片と考えられる。幅2.75㎝、残存長さ2.65㎝、厚さ0.75㎝、重さ4.5ｇである。

この住居跡からは実測図に挙げた以外にも多数のサヌカイトの剝片が出土しており、その総重量は340.6ｇに及ぶ。その一部９点を産地同定したところ、不明の１点を除き、全て金山東産との結果（第４章１節）を得ている。

時　期　出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ０２（図版６～８　写真図版８・９・110）

検出状況　Ⅰ区の中央部、やや西側で検出した（第35図）。SH03・SH04の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈する。北東辺と南東辺はほぼ直線的であるのに対して、北西辺と南西辺はわずかに弧を描いている。主柱穴を基準とした方位はＮ40°Ｅである。

北西辺が4.5ｍを測るのに対して、他の３辺はいずれも４ｍを測る。検出面から床面までの深さは７㎝～10㎝と比較的浅く、床面における標高は6.26ｍである。床面積は20.28㎡である。

埋　土　褐色シルト質極細砂１層が堆積していた。当層のなかには炭が含まれていた。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑を検出している。

柱　穴　４穴検出している。いずれも、掘り方の平面形は円形を呈する。

Ｐ１は掘り方径26㎝、柱痕径14㎝、床面からの深さ35㎝を測る。Ｐ２は掘り方径30㎝、柱痕径15㎝、床面からの深さ54㎝を測る。Ｐ３は掘り方径40㎝、柱痕径22㎝、床面からの深さ51㎝を測る。Ｐ４は掘り方径32㎝、柱痕径17㎝、床面からの深さ47㎝を測る。

柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間が2.57ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が2.25ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が2.20ｍ、Ｐ４－Ｐ１間が2.15ｍと、各辺の規模同様Ｐ１－Ｐ２間を除いてほぼ一定している。

ところで、平面的な調査終了後、柱穴の断ち割りを行ったところ、Ｐ３とＰ４の柱痕内において、壺の一部が出土している。加えて、Ｐ３とＰ４から出土した土器は接合関係にある。つまり、同一個体の壺（101）を割り、柱を抜いた後に意識的に埋められたものと考えられる。

周壁溝　全周する。床面での幅10㎝、底部幅４㎝を測り、検出面からの深さは10～14㎝、床面からの深さは７㎝である。

中央土坑　４穴の主柱穴に囲まれたほぼ中央部に、土坑Ａと土坑Ｂがセットで検出された。北東側に土坑Ａが、南西側に土坑Ｂが位置する。

土坑Ａ　平面形は溝状を呈し、主軸方向で1.40ｍ、その直交方向で30㎝を測る。断面形は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは８㎝である。当土坑内からは、多量の炭が出土し、特に下層は炭層となっていた。またその下面は焼けていた（図版６）。

土坑Ｂ　平面形は円形を呈し、その径は70cmを測る。最深部における検出面からの深さは24cmである。炭をはじめとして、顕著な遺物は出土していない。

出土遺物　土器と土製紡錘車が出土している。

土　器　壺・甕・高坏が出土している。

壺　広口壺（101）・無頸壺（102・103）・直口壺（104）が出土している。

広口壺　101は前述したようにＰ３・Ｐ４から出土し接合したものであるが、当住居跡埋土上面から出土した土器溜とも接合関係にある。体部は内外面ともハケ調整により仕上げられ、外面中位にはハケ調整後ヘラ磨きが施されている。

無頸壺　102については、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。103は、口縁部内外面をナデ調整により仕上げられ、体部外面にはわずかにヘラ磨き痕が認められる。

直口壺　104の１個体のみであるが、内面をナデ調整により仕上げられている。

甕　105の１個体が出土している。体部下半の一部を欠くが、ほぼ完形に復元できる。体部下半については、調整は観察できない。

高　坏　脚部下半１個体（106）が出土している。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

土製紡錘車　甕の体部を転用したもの（107）で、打ち欠いて成形している。4.25cm×4.80cmと楕円形を指向する。厚さは５mmを測る。中央部には径５mmの穿孔が認められる。

時　期　出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ０３（図版９　写真図版10）

検出状況　Ⅰ区中央部やや西側で検出した（第35図）。SH02の西側、SH05の南側に位置する。SH04とは平面的にほぼ重複しており、当住居跡の埋没後SH04が建て替えられている。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈するが、全体的に円形を指向する。主柱穴を基準とした方位はN21°Eである。

一辺6.40ｍを測る。検出面（SH04の床面）から床面までの深さは15～20cmで、床面における標高は6.06ｍである。検出した床面積は29.7㎡である。

埋　土　中央土坑を除いて黒褐色シルト混じり極細砂１層からなる。

屋内施設　柱穴と土坑を検出した。

柱　穴　４穴検出している。Ｐ１は掘り方径27cm、柱痕径13cm、床面からの深さ24cmを測る。Ｐ２は、掘り方径23cm、柱痕径11cm、床面からの深さ23cmを測る。Ｐ３は、掘り方径34cm、床面からの深さ36cmを測るが、柱痕は確認できなかった。Ｐ４は、掘り方径29cm、柱痕径13cm、床面からの深さ20cmを測る。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で3.03ｍ、Ｐ２－Ｐ３間で4.16ｍ、Ｐ３－Ｐ４間で3.00ｍ、Ｐ４－Ｐ１間で4.40ｍを測る。

土　坑　２基検出している。

土坑１　北東側周壁中央部の周壁溝に接した位置にある。平面形はほぼ円形を呈し、主軸方向で61cm、その直交方向で58cmを測る。断面形は緩やかなＵ字形を呈し、最深部における床面からの深さは24cmである。

埋土は２層からなり、下から暗黒褐色細砂質シルト・黒褐色シルト混じり細砂の順に堆

積していた。いずれも人為的に埋められたものと考えられる。

土坑２　Ｐ３の北約60cmに位置する。平面形はやや歪んでいるが、楕円形を指向する。主軸方向で80cm、その直交方向で52cmを測る。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、黄褐色シルト混じり細砂１層からなる。

出土遺物　土器のみが出土している。高坏の口縁部片１点（109）が埋土中から出土している。内外面ともていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。

時　期　SH04との切り合い関係、および出土土器から判断して弥生時代中期と考えられる。

ＳＨ０４（図版９～11　写真11・12・175）

検出状況　SH03と平面的に同じ位置で、若干拡張する形で建て替えられた住居跡である。さらに、周壁溝の切り合いおよび柱穴の切り合いから、当住居跡についても建て替えが行われ、西側へわずかに拡張している（第37図）。建替え前をSH04（古）、建替え後をSH04（新）と呼称する。

形状・規模　SH04（古）・SH04（新）ともに隅丸方形を呈するが、西辺については直線的な傾向は認められず、円形を指向する。主柱穴を基準とした方位は、N67°Wを指向する。

SH04（古）は、東西方向及びその直交方向とも７ｍを測る。これに対してSH04（新）は、南北方向は同じであるが、東西方向の規模が7.30ｍと30cm西側に大きくなる。検出面から床面までの深さは、（古）・（新）とも６cmを測り、床面における標高は6.20ｍである。検出した床面積は、SH04（古）で43.7㎡、SH04（新）で47.6㎡を測る。

埋　土　中央土坑を除き、暗褐色砂混じりシルト１層が堆積していた。

屋内施設　柱穴・中央土坑・周壁溝を検出した。中央土坑およびその東側・西側の柱穴と周壁溝の一部は両住居跡に共通する。

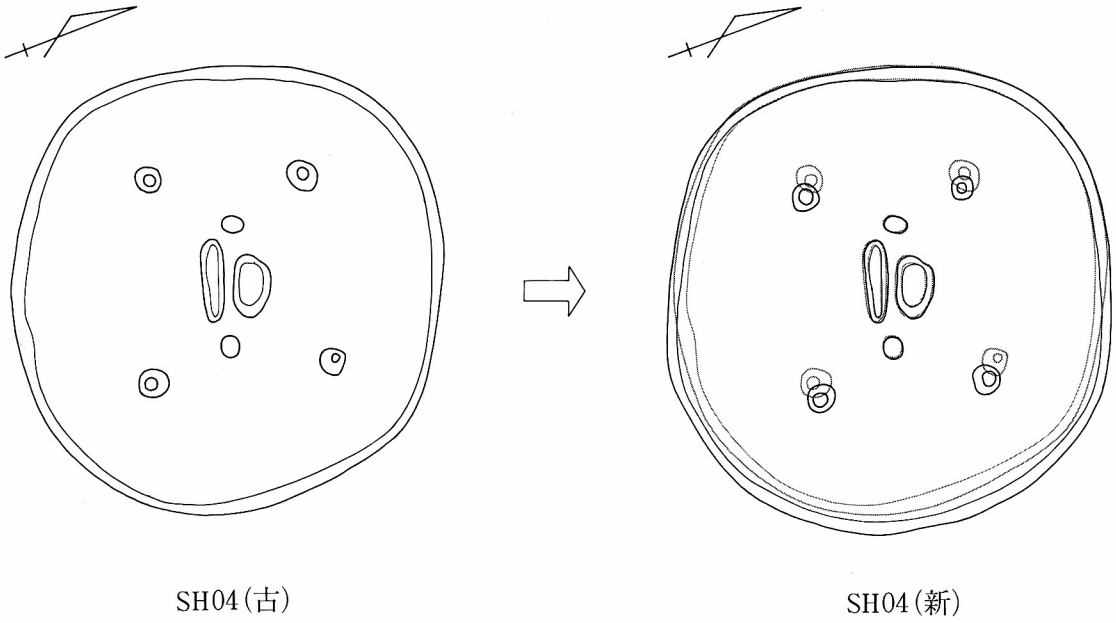
柱　穴　SH04（古）はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４からなり、SH04（新）はＰ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８からなる。いずれもSH04（新）の柱穴がSH04（古）の柱穴を西側へ平行移動する形で掘り直されている。

（古）　Ｐ１は、掘り方径35cm、柱痕径13cm、床面からの深さ34cmを測る。Ｐ２は、掘り方径44cm、柱痕径20cm、床面からの深さ37cmを測る。Ｐ３は、掘り方径42cm、柱痕径22cm、床面からの深さ30cmを測る。Ｐ３は、掘り方径42cm、柱痕径22cm、床面からの深さ30cmを測る。Ｐ１－Ｐ２間の距離は3.0ｍ、Ｐ２－Ｐ３の間の距離は2.7ｍ、Ｐ３－Ｐ４の間の距離は3.2ｍ、Ｐ４－Ｐ１の間の距離は2.7ｍを測る。

（新）　Ｐ５は掘り方径48cm、柱痕径21cm、床面からの深さ22cmを測る。Ｐ６は掘り方径33cm、柱痕径16cm、床面からの深さ28cmを測る。Ｐ７は掘り方径46cm、柱痕径20cm、床面からの深さ24cmを測る。Ｐ８は掘り方径41cm、柱痕径18cm、床面からの深さ29cmを測る。

Ｐ５－Ｐ６間の距離は2.9ｍ、Ｐ６－Ｐ７の間は3.0ｍ、Ｐ７－Ｐ８の間は3.2ｍ、Ｐ８－Ｐ５の間は2.5ｍを測り、両住居跡の柱穴間距離はほぼ同じである。

他　Ｐ９とＰ10は中央土坑の西側と東側に位置する。２基の中央土坑の中間部の主軸とＰ９・Ｐ10を結ぶ線は一致する。Ｐ９は、掘り方径35cm、柱痕径13cm、床面からの深さ５cmを測る。Ｐ10は、掘り方径35cm、床面からの深さ５cmを測る。



第37図　SH04の建て替え

周壁溝　SH04（古）に伴う周壁溝は、東側を中心にSH04（新）に伴う周壁溝に切られているため、全体を復元することはできない。床面における幅15cmを測り、床面からの深さは３cm、住居跡検出面からの深さは９cmである。

SH04（新）に伴う周壁溝は全周する。床面における幅20cmを測り、床面からの深さは３cm、住居跡検出面からの深さは９cmである。

中央土坑　SH04（古）・SH04（新）に共通する。それぞれの４穴の主柱穴に囲まれたほぼ中央部に、土坑Ａと土坑Ｂがセットで検出された。北側に土坑Ａが、南側に土坑Ｂが位置する。両土坑を合わせた面積は0.83㎡で、床面積に対する比は2.1％である。

土坑Ａ　平面形は溝状を呈し、主軸方向で1.28ｍ、その直交方向で30cmを測る。断面形は皿形に近い逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは10cmである。埋土は黒褐色砂混じりシルト１層からなり、炭がわずかに含まれていた。脚部の小片が出土している。

土坑Ｂ　平面形は楕円形を指向する。主軸方向で1.20ｍ、その直交方向で60cmを測る。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。埋土は２層からなるが、下層にやや多くの炭が含まれていた。甕の口縁部（108）が出土している。

出土遺物　土器と石器が出土している。土器・石器とも、床面を検出した時点で建て替えの存在が明らかとなったため、SH04（古）・SH04（新）のどちらに伴うのかについては明らかにできなかった。

土　器　図化できたのは108の甕のみである。108は、口縁部内外面をナデ調整、体部内面をハケ調整により仕上げられているが、体部外面については観察できない。

他に、埋土中より、直口壺の口縁部・無頸壺の口縁部・飯蛸壺などが出土している。

石　器　Ｓ44は柱状片刃石斧である。長さ20cm、幅4.8cm、厚さ2.9cm、重さ592.9ｇ。大型で丁寧に研磨されているが、一方の側面は剝離したままの状況で、そのまま使用していたものらしい。先端に敲打痕がみられる。石材は緑色片岩である。

時　期　SH03との切り合い関係および出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ０５（図版12・13　巻首図版13　写真図版13～15・110・111）

検出状況　SH03・SH04の北側に位置する（第35図）。SD04に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。一部が調査区外までかかる以外はほぼ完存する。

形状・規模　平面形は円形を呈するが、全体的に歪んでおり、南北方向に若干広くなっている。主柱穴を基準とした方位はＮ70°Ｗである。

径5.4ｍを測り、検出面からの深さは５㎝で、床面の標高は6.40ｍである。検出した床面の面積は20.6㎡である。

埋　土　灰黄褐色シルト質極細砂１層が堆積していた。

屋内施設　柱穴・中央土坑・土坑１・周壁溝を検出した。

柱　穴　６穴検出したが、主柱穴になるのは４穴である。

主柱穴　Ｐ１は、掘り方径43㎝、柱痕径16㎝、床面からの深さ36㎝を測る。Ｐ２は、掘り方径39㎝、柱痕径18㎝、床面からの深さ21㎝を測る。Ｐ３は、掘り方径39㎝、柱痕径17㎝、床面からの深さ57㎝を測る。Ｐ４は、掘り方径43㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ57㎝を測る。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で2.36ｍ、Ｐ２－Ｐ３間で1.94ｍ、Ｐ３－Ｐ４間で2.10ｍ、Ｐ４－Ｐ１間で2.30ｍを測る。

Ｐ１　なお、各柱穴を断ち割ったところ、Ｐ１においては、掘り方底部で柱痕の周囲を石で囲む様子を確認することができた。さらに、柱痕内からは、柱の抜き取り後に落ち込んだと考えられる高坏の脚（112）を確認した。

Ｐ３　また、Ｐ３においては、柱痕の底部に高坏の口縁部（113）を逆にして入れている様子を確認することができた。おそらく柱を建てる前に入れたものと考えられ、当時の地鎮祭的なものの存在を示す例となるものと考えられる。

他の柱穴　Ｐ５は、掘り方径30㎝、柱痕径15㎝、床面からの深さ10㎝を測る。Ｐ６は、掘り方径32㎝、柱痕径16㎝、床面からの深さ12㎝を測る。Ｐ５とＰ６は、両柱穴の中間に中央土坑があり、中央土坑を構成する２基の土坑の接線の延長上に位置する。

なお、Ｐ６から甕の体部片（111）が出土している。

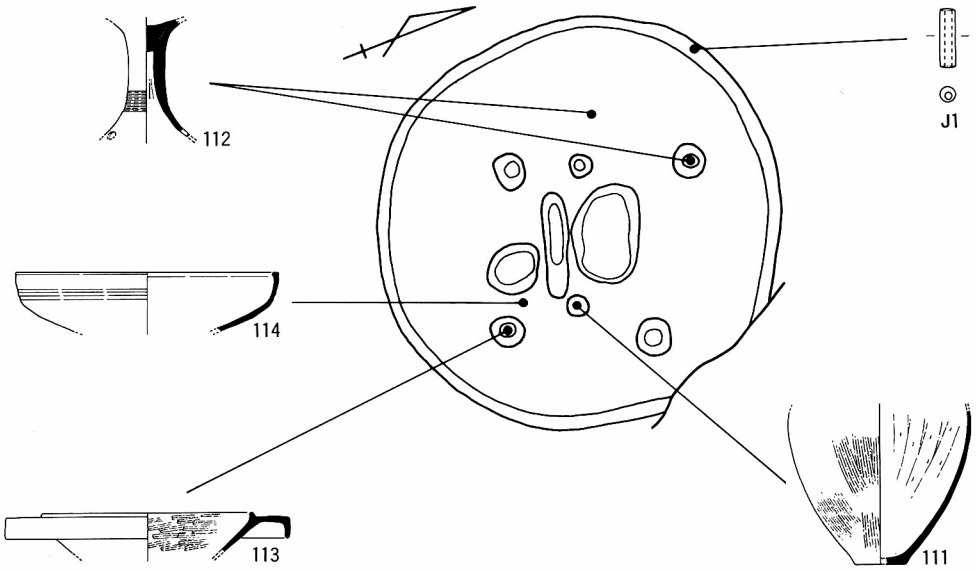
中央土坑　４穴の主柱穴に囲まれた範囲に、土坑Ａと土坑Ｂとがセットで検出された。南西側に土坑Ａが、北東側に土坑Ｂが位置する。なお、両土坑を合わせた面積は1.35㎡で、当住居跡の床面積に占める割合は6.6％である。

土坑Ａ　平面形は溝状を呈する。長軸方向で1.38ｍ、その直交方向で32㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは10㎝を測る。埋土は暗褐色シルト質極細砂１層からなり、炭が比較的多く含まれていた。

土坑Ｂ　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.30ｍ、その直交方向で90㎝を測る。横断面は２段に落ち込み、上段は逆台形、下段はＵ字形を呈する。最深部における床面からの深さは26㎝を測る。

埋土は４層からなるが、土坑Ａのように炭を多く含む層は認められない。

土坑１　土坑Ａの南西、Ｐ３とＰ４を結ぶライン上に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向で80㎝、その直交方向で65㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは５㎝である。埋土は１層からなり、灰色シルト質極細砂である。



第38図　SH05遺物出土位置

周壁溝　検出した範囲では全周する。床面における幅は５～８㎝を測り、床面からの深さは４㎝、検出面からの深さは７㎝である。

出土遺物　土器と管玉（Ｊ１）が出土している（第38図）。

土　器　甕と高坏が出土している。

甕　口縁部（110）と体部（111）が出土している。110は大型甕に分類されるもので、頚部に突帯を貼り付け、その上にノ字状の刻み目を施している。111は、体部内面を縦方向（下→上）のヘラ削りにより仕上げられている。

高　坏　口縁部（113・114）と脚部（112）が出土している。113は、体部を内外面ともヘラ磨きにより、口縁部を内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。114は内外面ともナデ調整により仕上げられている。112は、脚部に７条の凹線が施されている。

管　玉　碧玉製である。長さ1.5㎝、直径４㎜。両面穿孔と思われる。色調は灰緑色である。

時　期　出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ０６（図版14　写真図版15・176）

検出状況　Ⅰ区の北端で検出している（第35図）。SD09・SD11・SD10によって切られている。遺構の残存状況は１/２程度である。

平面形は円形を呈する。規模は径6.3ｍ以上である。検出面から床面までの深さは15㎝で、床面の標高は6.32ｍである。

検出した床面積は10.7㎡を測り、本来の面積は約30㎡と復元される。

埋　土　黒褐色極細砂１層からなり、下位はにぶい黄褐色シルト質極細砂のブロックを含んでいる。

屋内施設　柱穴が検出されただけである。

柱　穴　合計２穴検出しているが、部分的な調査のため主柱穴は不明である。Ｐ１は掘り方径32㎝、柱痕径14㎝、床面からの深さ47㎝を測る。Ｐ２は掘り方径27㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ42㎝を測る。本来は４穴で主柱穴をなしていたものと考えられる。

周壁溝　周壁溝は検出された部分では全周している。床面での幅６㎝、底部での幅３㎝、検出面からの深さ18㎝、床面からの深さ４㎝を測る。

出土遺物　土器・管玉・石器が出土している。

土　器　甕（115）と蛸壺（116）が出土している。115は、口縁部内外面および体部内面をヨコナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げている。116は、内外面とも指オサエとナデ調整により仕上げられている。

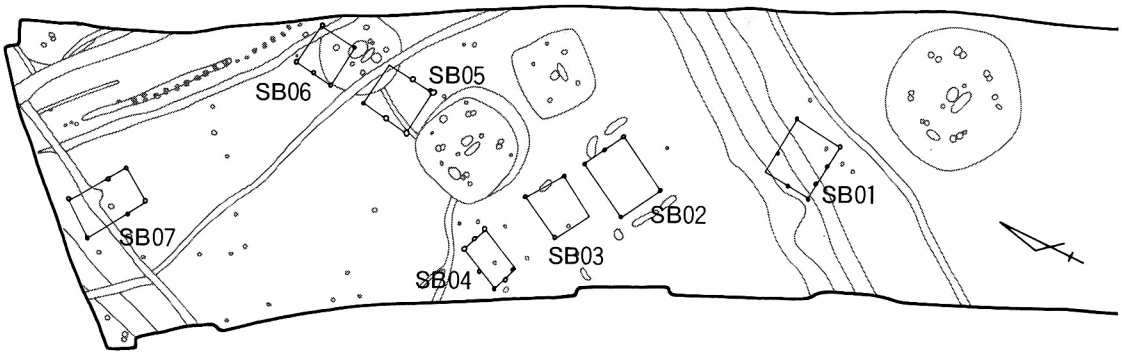
玉　Ｊ２は碧玉製の管玉である。長さ1.45㎝、直径0.40～0.35㎝と若干歪な形である。色調は緑灰色である。

石　器　Ｓ45・Ｓ46はサヌカイト製の石鏃である。Ｓ45は有茎式で、長さ4.6㎝、幅1.45㎝、厚さ0.75㎝、重さ4.1ｇ。かなり厚手のタイプである。また、有茎式とはいえ茎と体部の境界が不明瞭なタイプである。

Ｓ46は凸基式で、長さ2.85㎝、幅1.15㎝、厚さ0.55㎝、重さ1.6ｇ。体部中央に二次加工後研磨を施している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

Ⅱ．掘立柱建物跡



第39図　Ⅰ区第２面　掘立柱建物跡

ＳＢ０１（図版14）

検出状況　調査区中央部やや南側で検出した（第39図）。SH01の北西に位置し、SD01と平面的に重複しているが、当遺構との前後関係は明確にできない。

形状・規模　Ｎ７°Ｗに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行２間の掘立柱建物であるが、北東隅の柱穴を検出することはできなかった。梁行方向で3.20ｍ、桁行方向で3.65ｍを測り、当建物の面積は11.60㎡である。西桁行方向における柱穴間の平均距離は1.82ｍである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径34～42㎝、柱痕径13～21㎝、検出面からの深さ25～36㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　後述するSB02と建物の規模・柱穴の規模・埋土が同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ０２（図版15）

検出状況　調査区中央部やや北側で検出した（第39図）。SH02の南西側、SD03の北側にあたり、南側をSK01・SK02、北側をSK05・SK06によって囲まれている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　Ｎ59°Ｗに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行３間の掘立柱建物であるが、西隅および南西桁行の柱を検出することはできなかった。梁行方向で4.30ｍ、桁行方向で4.65ｍを測り、建物の面積は19.9㎡である。北東桁行方向の柱穴間の平均距離は1.55ｍである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径19～24㎝、柱痕径10～15㎝、検出面からの深さ23～30㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　出土遺物から直接時期を特定することは困難である。しかし、本建物の周囲にあるSK01・SK02・SK05・SK06が、当建物となんらかの関係があるものと考えられる。したがって、これらの土坑の時期、つまり弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ０３（図版15）

検出状況　調査区中央部やや北側で検出した（第39図）。SB02の北西側、SH03・SH04の南側に位置し、SB02とは棟軸方向をほぼ同じくする。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　Ｎ34°Ｅに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行１間の掘立柱建物であるが、南隅の柱穴は検出できなかった。梁行方向で2.90ｍ、梁行方向で3.25ｍを測り、建物の面積は9.42㎡である。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径21～24㎝、柱痕径12～14㎝、検出面からの深さ25～27㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SB02と棟軸方向を同じくすること等から判断して、弥生時代中期以降と考えられる。

ＳＢ０４（図版15）

検出状況　調査区中央部やや北側で検出した（第39図）。SB03の北西側、SH03・SH04の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　Ｎ29°Ｅに棟軸方向をとる、梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。北梁行方向で2.02ｍ、南梁行方向で1.80ｍ、東桁行方向で3.36ｍ、西桁行方向で3.18ｍを測る。柱穴間の平均距離は、北梁行方向で1.01ｍ、南梁行方向で0.90ｍ、東桁行方向で1.68ｍ、西桁行方向で1.59ｍを測る。建物の面積は6.79㎡である。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径19～32㎝、柱痕径10～16㎝、検出面からの深さ21～31㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　当建物についても、SB03と棟軸方向がほぼ同じであることから、SB03と同じ時期、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ０５（図版16）

検出状況　調査区中央部やや北側で検出した（第39図）。SB06の南側、SH03・SH04の北側に位置する。SD04・SD05と切り合い関係にあり、SD04に切られている。

形状・規模　Ｎ８°Ｗに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行２間の掘立柱建物であるが、北東隅の柱穴はSD04に切られ、検出できなかった。南梁行方向で3.18ｍ、東梁行方向で3.68ｍを測る。桁行方向における柱穴間の平均距離は1.84ｍである。建物の面積は6.86㎡である。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径35～43㎝、柱痕径15～20㎝、検出面からの深さ30～42㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SB02～SB04と建物の規模、柱穴の規模・埋土が同じこと、およびSD04との切り合い関係から、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ０６（図版16）

検出状況　調査区中央部やや北側で検出した（第39図）。SB05の北側に位置し、SH05及びSD04と切り合い関係にある。SH05とは、当住居跡の床面を検出した段階で本建物の柱穴を確認したため、正確な切り合い関係は明確にできない。また、SD04との切り合い関係についても明確にできない。

形状・規模　Ｎ50°Ｗに棟軸方向をとる、梁行２間、桁行１間の掘立柱建物であるが、東梁行方向の中間部の柱穴については確認できなかった。西梁行方向で2.65ｍ、東梁行方向で2.67ｍを測り、桁行方向は北側・南側ともに3.00ｍである。西梁行方向における柱穴間の平均距離は1.32ｍである。建物の面積は7.98㎡である。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径25～31㎝、柱痕径13～15㎝、検出面からの深さ28～41㎝を測る。

出土遺物　土器の小片が出土しているが、時期は特定できない。

時　期　SB05と棟軸方向・規模が同じことから、SB05と同じ時期と考えられる。

ＳＢ０７（図版16）

検出状況　調査区北端部で検出した（第39図）。SD12と切り合い関係にあるが、その前後関係は明確にできない。

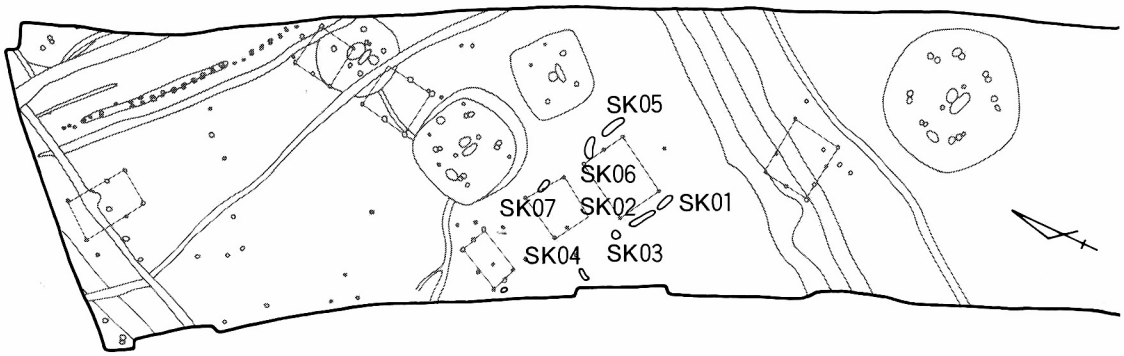
形状・規模　Ｎ55°Ｗに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行３間の掘立柱建物であるが、南西桁行方向において南西隅の北東側の柱穴は確認できなかった。南西梁行方向で2.92ｍ、北東梁行方向で2.48ｍを測り、桁行方向はともに4.42ｍである。北東桁行方向における柱穴間の平均距離は1.47ｍである。建物の面積は12.5㎡である。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径18～25㎝、柱痕径９～16㎝、検出面からの深さ23～32㎝を測る。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SB01～SB06と建物の規模、柱穴の規模・埋土が同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

Ⅲ．土　坑



第40図　Ⅰ区第２面　土坑

ＳＫ０１（図版17）

検出状況　SK02の東側に位置する（第40図）。他の遺構との切り合い関係はない。SB02とは近接し、主軸方向をほぼ同じくすることから、両遺構間に関連があるものと考えられる。

形状・規模　平面形は長楕円形で、ほぼ東西方向に主軸をとる。主軸方向で1.40ｍ、その直交方向で48cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは５cmである。

埋没状況　灰黄褐色砂質シルト１層からなる。

出土遺物　甕の底部片が１点（119）出土している。内面には縦方向の弱いヘラ削りが、外面には縦方向のハケ目がわずかに観察される。

時　期　出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０２（図版17　写真図版16）

検出状況　SK01の西・SK03の東側に位置する（第40図）。他の遺構との切り合いはなく、完存する。SB02とは近接し、主軸方向をほぼ同じくすることから、両遺構は何らかの関連があるものと考えられる。

形状・規模　平面形は長楕円形で、ほぼ東西方向に主軸をとる。主軸方向で1.98ｍ、その直交方向で49cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmである。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　甕の口縁部（117）と壺の底部（118）が各１個体出土している。

時　期　出土遺物から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０３（図版17　写真図版16・111）

検出状況　SK02の西側に位置する（第40図）。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で68cm、その直交方向で52cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　暗黒灰色シルト質極細砂１層からなる。

遺物出土状況　口縁部から底部付近まで残存する甕が、土坑底に横たえられた状態で出土している。この土器の主軸方向と当土坑の主軸方向とはほぼ一致する。この他、埋土中から同じく口縁部から底部付近まで残存する甕が出土している。

出土遺物　甕が２個体と高坏脚部が出土している。121は二次焼成を受けている。

時　期　出土遺物から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０４

検出状況　SB03の南側、SK03の西側に位置する（第40図）。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で1.04ｍ、その直交方向で31㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは５㎝を測る。

埋没状況　暗褐色砂混じりシルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SK03と主軸方向がほぼ同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０５

検出状況　SB02の北側、SK06の東側に位置する（第40図）。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で1.73ｍ、その直交方向で48㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは８㎝を測る。長軸はＮ29.5°Ｅを指向する。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SK01・SK02と主軸方向をほぼ同じくし、SB02を意識していることから、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０６

検出状況　SB02の北側、SK05の西側に位置する（第40図）。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で1.63ｍ、その直交方向で58㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは10㎝を測る。長軸はＮ80°Ｅを指向する。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

遺物出土状況　土坑の肩の斜面に壺の肩部の小片がはりつくような状態で出土している。

出土遺物　壺の肩部の小片が出土している。ヘラ描沈線紋が２条残存する。小片のため図化できなかった。

時　期　出土遺物から判断して弥生時代前期後半と考えられる。

ＳＫ０７

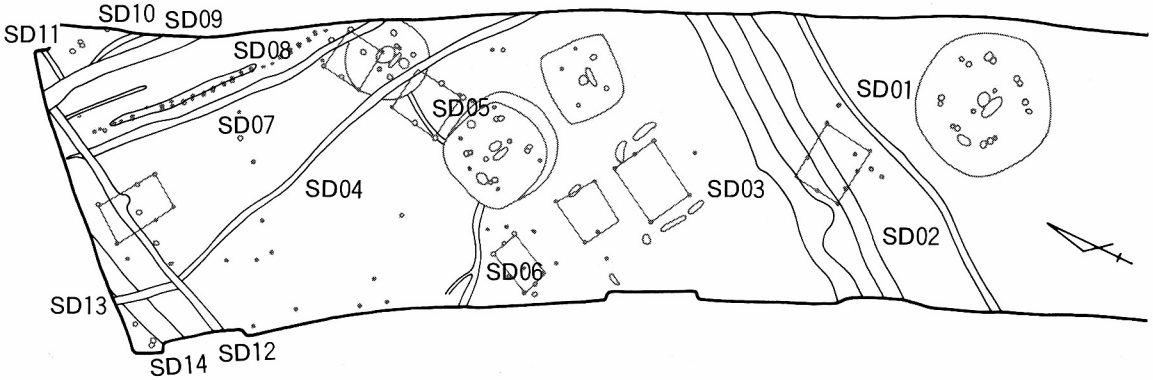
検出状況　SB03の北梁行の柱穴間に位置する（第40図）。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で1.11ｍ、その直交方向で34㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６㎝を測る。

埋没状況　暗褐色極細砂質シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SB03と主軸方向を同じくし、SB03に伴う遺構の可能性も高いことから、弥生時代中期後半と考えられる。



第41図　Ⅰ区第２面　溝

Ⅳ．溝

ＳＤ０１（写真図版17）

検出状況　Ⅰ区中央部南側に位置する（第41図）。SD02の南東、SH01の西に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　南西から北東へのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。検出した長さは23.3ｍである。横断面はＵ字形を呈し、検出面における幅36～48㎝を測り、最深部における検出面からの深さは23㎝である。底部の標高は北東端で6.01ｍ、南西端で6.04ｍである。

埋没状況　黒褐色砂混じりシルト１層からなり、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物　わずかに弥生土器片が出土している。

時　期　出土遺物から判断して弥生時代と考えられるが、より細かな時期は特定できない。

ＳＤ０２（図版19　写真図版17）

検出状況　Ⅰ区中央部（第41図）で調査区を斜めに横切るような形で検出された。

形状・規模　溝の方向は北東から南西である。検出した長さは20.98ｍである。幅は検出面で1.46～0.92ｍ、溝底で72～25㎝を測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは42㎝である。溝底の標高は北東端は5.93ｍ、南西端は5.83ｍであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　埋土は３層に分けられ、上層から暗褐灰色シルト混じり極細砂、暗褐灰色シルト混じり極細砂（ラミナ）、黒褐色シルト質極細砂である。粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。

出土遺物　石器のみが出土している。

石　器　Ｓ47は磨石である。長さ8.5㎝、幅7.15㎝、厚さ5.55㎝、重さ491.7ｇ。磨面は卵形で、ほぼ平坦で中央部にくぼみがある。磨面を下に置くと上面のふくらみはちょうど手のひらにおさまりやすい形状、大きさである。石材は細粒ハンレイ岩で、ややざらついた質感である。

時　期　出土遺物・埋土等から時期を特定することは困難である。SD01とほぼ平行することから、弥生時代の可能性が高いものと考えられる。

ＳＤ０３（図版19　写真図版17）

検出状況　Ｉ区中央部で検出した（第41図）。SD02の北西側に位置し、この溝とほぼ平行している。SB01と切り合い関係にあり、SB01の柱穴を切っている。

形状・規模　南西から北東にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびる。検出した長さは20.4ｍである。横断面は逆台形に近いＵ字形を呈し、検出面における幅は96㎝～2.63ｍを測る。最深部における検出面からの深さは52㎝を測り、底部における幅は23㎝～１ｍを測る。底部における標高は、南西端で5.77ｍ、北東端で5.87ｍである。

埋没状況　３層からなり、下から暗黒褐色シルト質極細砂、暗褐灰色極細砂質シルト、暗褐灰色極細砂混じりシルトの順に堆積していた。層相から判断して、徐々に埋没していったものと考えられる。

出土遺物　当溝内からは遺物は全く出土していない。

時　期　SD02とほぼ平行していることから、弥生時代の範疇で捉えられるものと考えられる。

ＳＤ０４（写真図版17）

検出状況　Ｉ区北部で検出した（第41図）。SH05を切り、SD12に切られている。またSB05とも切り合い関係にあるが、その前後関係を明確にすることはできない。

形状・規模　北西から南東へのびる溝で、南東端は調査区外までのび、北西端はSD12に切られている。検出した長さは28.5ｍである。横断面は箱形に近い逆台形を呈し、検出面における幅は30～61㎝である。最深部における検出面からの深さは23㎝を測り、底部における幅は19～42㎝である。底部の標高は、南東端で6.07ｍ、北西端で6.19ｍである。

埋没状況　３層からなり、下から暗灰色極細砂質シルト、暗灰色極細砂混じりシルト、黒色シルト混じり黒褐色シルト質砂の順に堆積しているが、特に最上層については人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器片がわずかに出土しているが、器種等は特定できない。

時　期　SH05との切り合い関係から、弥生時代中期後半～後期と考えられる。

ＳＤ０５

検出状況　Ｉ区中央やや北側で検出した（第41図）。当溝の両端においてSH03・SH04及びSH05と切り合い関係にあり、いずれも切られている。また、SB05とも切り合い関係にあり、一つの柱穴に切られている。本来はSD06と同一の溝の可能性が高い。

形状・規模　南西から北東へわずかに弧状をなしてのびる溝で、両端をSH03・SH04及びSH05に切られている。検出した長さは3.35ｍである。横断面は箱形を呈し、検出面における幅は16～30㎝である。最深部における検出面からの深さは14㎝を測り、底部における幅は９～16㎝である。底部における標高は、南西端で6.21ｍ、北東端で6.18ｍである。

埋没状況　１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SH03・SH04・SH05との切り合い関係より、弥生時代中期後半以前と考えられる。

ＳＤ０６

検出状況　Ⅰ区中央部やや北西側で検出した（第41図）。SD05の南西側に位置する。SH03・SH04と切り合い関係にあり、両遺構に切られている。

形状・規模　ほぼ東西方向にのびる溝で、東側をSH03・SH04に切られ、西側は調査区外までのびている。検出した長さは6.59ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は26～49㎝である。最深部における検出面からの深さは28㎝を測り、底部における幅は９～34㎝である。底部の標高は東端で5.99ｍ、西端で6.05ｍである。

埋没状況　１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SH03・SH04との切り合い関係より、弥生時代中期後半以前と考えられる。

ＳＤ０７

検出状況　Ⅰ区北隅を斜めに横切る形で検出された（第41図）。SD12に切られ、SH05を切っている。

形状・規模　溝の方向は北西から南東である。長さは21.97ｍが検出された。幅は検出面で69～42㎝、溝底で36～７㎝を測る。断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは14㎝である。溝底の標高は北西端は6.37ｍ、南東端は6.33ｍであり、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SH05・SD12との切り合い関係から、弥生時代中期後半～奈良時代と考えられる。

ＳＤ０８

検出状況　Ⅰ区北隅付近で検出された（第41図）。連続する足跡状の列に切られている。SD07とほぼ平行に流れている。

形状・規模　溝の方向は北西から南東である。長さは10.49ｍが検出された。幅は検出面で60～32㎝、溝底で30～15㎝を測る。断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは４㎝である。溝底の標高は北西端で6.42ｍ、南東端で6.37ｍを測り、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂１層で、SD07とよく似ている。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　時期を判断する材料がなく、明確にできない。

ＳＤ０９（図版19　写真図版16・111）

検出状況　Ⅰ区北隅を斜めに横切る形で検出された（第41図）。SD10・SD11・SD12を切っている。

形状・規模　溝の方向は北西から南東である。長さは9.67ｍが検出された。幅は検出面で1.47～0.76ｍ、溝底で86～32㎝を測る。断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは32㎝である。溝底の標高は北西端で6.14ｍ、南東端で6.13ｍを測り、北西方向から南東方向へ流れてい

たものと思われる。

埋没状況　埋土は４層で、底部に黒色シルトが溜まり、その上に２層のラミナがみとめられる。徐々に埋没していったものと思われる。

出土遺物　飛鳥時代の須恵器の坏身・蓋や土師器の甕や高坏が出土している。

131は須恵器の坏Ａである。口径14.5㎝、器高3.15㎝。灰白色で、外面に火だすきがみられる。底部は回転ヘラ切り後なでている。

133は土師器の甕である。口径15.7㎝、残存高7.5㎝、腹径14.8㎝。胴があまり張らず口径が最大径になるタイプの小型の甕である。胴部外面に一部ハケメが残り、内面は板でなでていると思われる。色調は橙から黄褐色であり、ススなどの付着はみられない。

時　期　出土遺物から、飛鳥時代～奈良時代と考えられる。

ＳＤ１０

検出状況　調査区北東隅で検出した（第41図）。SH06を切り、SD09に切られている。

形状・規模　北西から南東方向のほぼ直線的にのびる溝である。北西側はSD09に切られ、南東側は調査区外までのびている。検出した長さは3.90ｍである。横断面はＵ字形を呈し、検出面における幅は21～34㎝を測る。最深部における検出面からの深さは18㎝を測る。底部の標高は、北西端で6.30ｍ、南東端で6.40ｍである。

埋没状況　人為的に埋め戻されたと考えられ、黒褐色シルトと灰色シルト混じり砂が混じり合った埋土からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SH06およびSD09との切り合い関係より、弥生時代中期後半以降、７世紀後半以前と考えられる。

ＳＤ１１（図版19　写真図版111）

検出状況　調査区北東隅で検出した（第41図）。SH06を切り、SD09に切られている。

形状・規模　北東から南西方向にほぼ直線的にのびる溝である。検出した長さは2.13ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は26～34㎝である。最深部における検出面からの深さは20㎝を測る。底部における標高は、北東端で6.32ｍ、南西端で6.21ｍである。

埋没状況　黒灰色～黒褐色シルト混じり灰色極細砂１層からなり、その層相から人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　132は須恵器の坏Ｂである。口径14.8㎝、器高3.7㎝。灰白色で、外面の一部に自然釉がかかっている。砂粒を多く含み、形も歪んでいる。

時　期　SD09との切り合い関係、出土遺物から判断して、７～８世紀代と判断される。

ＳＤ１２

検出状況　調査区北西部で検出した（第41図）。SD04・SD07・SD13を切り、SD09に切られている。このほか、SB07と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模　南西から北東へほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区外までのび、北東端はSD09

に切られている。検出した長さは、18.4ｍである。横断面はＵ字形を呈し、検出面における幅は41～86㎝を測る。最深部における検出面からの深さは26㎝を測る。底部の標高は北東端で6.16ｍ、南西端で6.01ｍである。

埋没状況　２層からなり、下から黒褐色極細砂混じりシルト、黒灰色極細砂質シルトが堆積していた。下層は人為的な埋め戻しによるもので、上層は自然堆積により埋没している。

出土遺物　わずかに弥生土器の小片が出土している。

時　期　後述するように、弥生時代後期のSD14を切るSD13を切り、さらに７～８世紀代のSD09に切られていることから、弥生時代後期から７世紀にかけての時期と考えられる。

ＳＤ１３

検出状況　調査区北西部で検出した（第41図）。SD14を切り、SD12に切られている。

形状・規模　北西から南東方向へほぼ直線的にのびる溝である。北西端はⅡ区へのび、南東端はSD12に切られている。検出した長さは4.05ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は49～58㎝を測る。最深部における検出面からの深さは20㎝を測る。底部の標高は北西端で6.24ｍ、南東端で6.18ｍである。

埋没状況　２層からなり、下から黒灰色シルト混じり極細砂、黒褐色極細砂混じりシルトが堆積している。下層については自然堆積によるものと判断されるが、上層については人為的に埋め戻されたようである。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SD12・SD14との切り合い関係から、弥生時代後期から７世紀にかけてと考えられる。

ＳＤ１４（図版19　写真図版26）

検出状況　調査区北西部で検出した（第41図）。SD13に切られている。

形状・規模　南西から北東方向へほぼ直線的にのびる溝である。南西端は調査区外までのび、北東端はⅡ区へのびている。検出した長さは6.91ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は1.14ｍ～1.86ｍを測る。最深部における検出面からの深さは74㎝を測る。底部における標高は、南西端で5.90ｍ、北東端で5.94ｍである。

埋没状況　６層からなる。４～６層の堆積による埋没後、再び掘り返され、再度１～３層が堆積している。４～６層は自然堆積と考えられるが、１～３層は人為的に埋め戻されたものと判断される。

出土状況　再掘削後の埋没過程で弥生時代後期の甕が出土している。

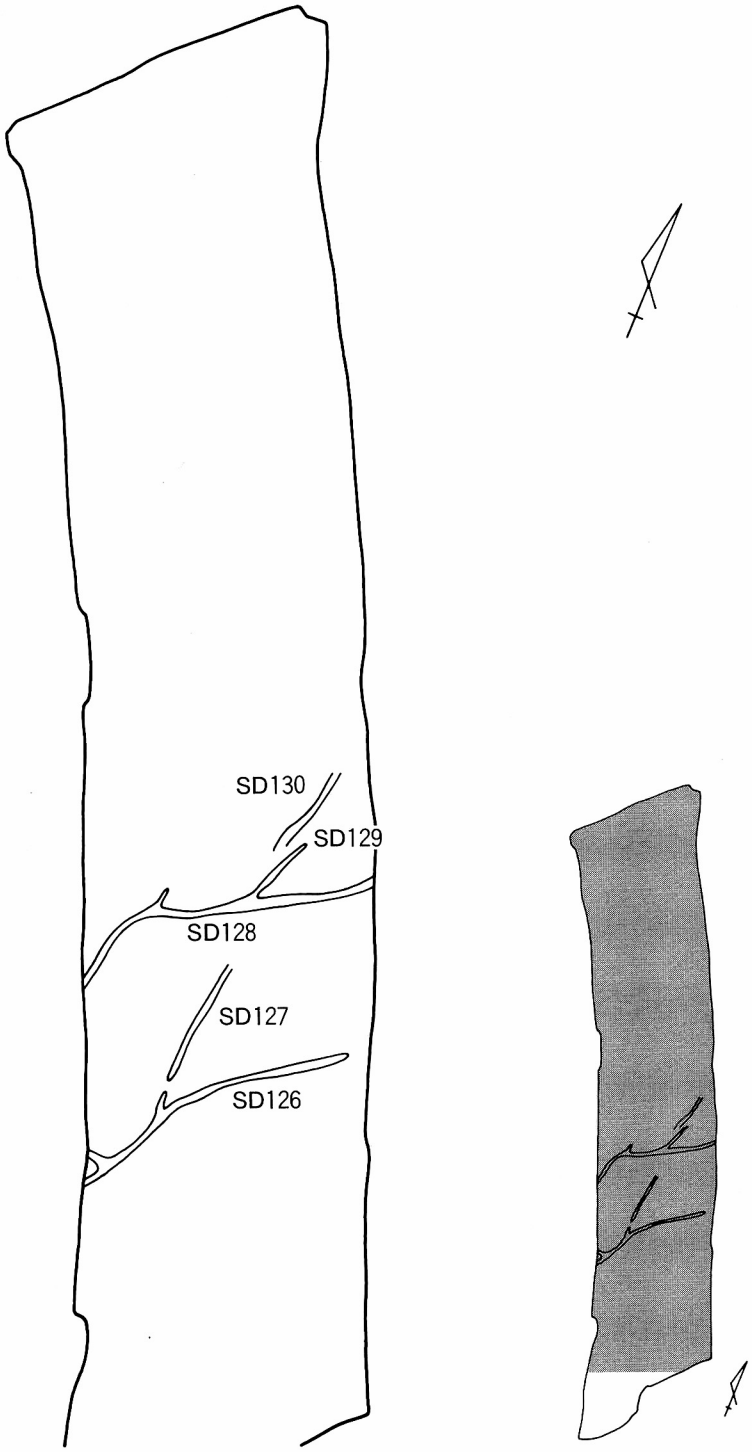
出土遺物　上記の再掘削の埋没に伴う過程で出土した甕が出土したのみである。当初の埋没過程の層からは全く出土していない。

時　期　弥生時代後期の段階で再掘削されているが、当初の掘削時期は特定できない。

４．第３面(1)面の調査

(1)　概　要（図版20　写真図版18）

概　要　Ⅰ区では土壌層Ⅱの上面において、水田畦畔を切る形で溝SD126～SD130の５本の溝を検出した。これらの溝から出土している遺物が小片ながら弥生時代前期末のものである。層位的にみて第２面で検出された最古の遺構より古いものであり、上層の遺構の掘り残しではなく、下位の面にあたるものと考え、これを第３面(1)の遺構と認識している。これらの溝群は、Ⅰ区の中央よりやや南よりに集中している。



第42図　Ⅰ区第３面(1)

(2)　調査の結果

ＳＤ１２６（図版21）

検出状況　Ⅰ区中央部やや南側に位置する（第42図）。南西部で二股状の分岐が認められる。また、当溝のほぼ中間部から北側にわずかに溝状の張り出しが認められる。これは、その北側のSD127に続くものと考えられるが、当溝との切り合い関係は明確にできない。他の遺構との切り合い関係も認められない。

形状・規模　北西から南西方向にわずかに弧状を呈する溝である。北東端は調査区内で収束し、南西端は調査区外までのびている。検出した長さは24.5ｍである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は24～34㎝を測る。最深部における検出面からの深さは10㎝である。底部の標高は、北東端で6.11ｍ、南西端で6.00ｍを測る。

埋没状況　暗灰色シルト１層からなる。

出土状況　溝底から甕の口縁部が出土している。

出土遺物　甕（134）と底部片（135）が出土している。134は、体部上半に５条からなるヘラ描沈線が２帯描かれている。135は、壺か甕の底部と考えられるが、特定できない。

時　期　出土遺物から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＤ１２７

検出状況　Ⅰ区中央やや南側に位置し（第42図）、SD126の北側にあたる。SD126中間部に認められるわずかな分岐の延長上にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　ほぼ南北方向に直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは8.4ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は31㎝～44㎝を測る。最深部における検出面からの深さは15㎝を測る。底部における標高は、北端で6.01ｍ、南端で6.03ｍを測る。

埋没状況　暗灰色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

ＳＤ１２８（図版21）

検出状況　調査区中央部に位置する（第42図）。当溝のほぼ中間部でSD129と分岐するが、当溝との前後関係は明確にできない。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　東北東－西南西方向にほぼ直線的な溝で、西側で北東－南西方向に屈曲している。両端とも調査区外までのびている。屈曲部付近で北側へ分岐する溝がわずかに認められる。検出した長さは21.3ｍである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は42～65㎝を測る。最深部における検出面からの深さは17㎝を測る。底部の標高は、東北東端で6.08ｍ、西南西端で6.01ｍである。

埋没状況　暗灰色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

ＳＤ１２９

検出状況　SD130の南側に位置する（第42図）。SD128から分岐する溝であるが、当溝との前後関係は明確にできない。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　南北方向にほぼ直線的な溝で、南端はSD128にとりつき、北端は調査区内で収束している。検出した長さは５ｍである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は24～33㎝を測る。最深部における検出面からの深さは８㎝を測る。底部の標高は、北端で6.18ｍ、南端で6.16ｍを測る。

埋没状況　暗灰色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

ＳＤ１３０

検出状況　SD129の北側に位置する（第42図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　南北方向にほぼ直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは6.3ｍである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は34～39㎝を測る。最深部における検出面からの深さは12㎝を測る。底部の標高は、北端で6.06ｍ、南端で6.08ｍである。

埋没状況　暗灰色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

５．第３面(2)面の調査

(1)　概　要（図版22　写真図版18）

概　要　Ⅰ区第３面(1)の溝を検出したのとほぼおなじレベルで水田畦畔を検出した。この面については第３面(2)としている。

(2)　調査の結果（写真図版19）

水田跡　第３面ほぼ全域で水田跡を検出した。計147区画を検出した。その面積は2,067㎡に及ぶ。

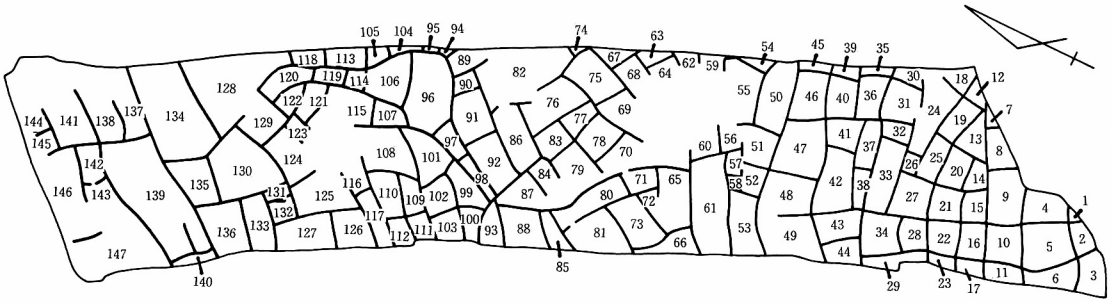
畦　畔　基本的には同規模の幅で、大畦畔・小畦畔の区別はない。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で10～15㎝、水田面で20～30㎝を測る。水田面との比高は５～10㎝である。

平面形　水田の区画は長方形ないし台形をなす。

面　積　一区画の広さは一定しておらず、最も狭い区画で0.4㎡、最も広い区画で28.9㎡を測る。ただし、調査区外までのびる区画には40㎡を越えるものも認られる。平均の区画面積は8.95㎡である。

標　高　水田面の標高は南側ほど低くなる傾向がある。もっとも高い水田で6.29ｍ、最も低い水田で5.81ｍと、48㎝の比高差がある。

なお、各水田区画の詳細については、次の第１表・第２表を参照されたい。



第43図　Ⅰ区第３面(2)　水田跡

第１表　Ⅰ区第３面(2)　水田跡一覧表（1）

（　）内は検出面積

No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）
1	5.82	(0.8)	12	5.88	(3.3)	23	5.86	(2.1)
2	5.83	(4.8)	13	5.87	5.2	24	5.89	
3	5.86	(8.4)	14	5.85	3.7	25	5.88	6.0
4	5.84	(9.3)	15	5.87	5.1	26	5.92	2.1
5	5.86	15.2	16	5.89	6.4	27	5.89	10.9
6	5.81	(8.4)	17	5.88	(3.2)	28	5.91	6.5
7	5.87	(1.2)	18	5.88		29	5.99	(3.9)
8	5.89	(6.4)	19	5.87	6.0	30	5.92	(3.7)
9	5.88	(13.5)	20	5.88	6.7	31	5.89	9.6
10	5.89	8.4	21	5.92	7.4	32	5.88	3.3
11	5.84	(4.2)	22	5.94	7.7	33	5.91	12.8

第２表　Ⅰ区第３面(2)　水田跡一覧表 (2)

No.	標高（m）	面積（m²）	No.	標高（m）	面積（m²）	No.	標高（m）	面積（m²）
34	5.98	10.4	72	6.06	(2.0)	110	6.13	8.3
35	5.95	(3.6)	73	6.04	12.4	111	6.13	(4.0)
36	5.94	8.3	74	6.09	0.4	112	6.13	(5.2)
37	5.93	6.1	75	6.05	13.7	113	6.19	(6.0)
38	5.94	2.8	76	6.09	17.6	114	6.16	2.4
39	5.99	(2.9)	77	6.07	4.8	115	6.17	12.4
40	5.98	8.9	78	6.08	10.0	116	6.14	17.6
41	5.90	6.8	79	6.10	13.2	117	6.13	(6.6)
42	5.95	14.1	80	6.05	12.8	118	6.24	(4.4)
43	5.94	8.0	81	6.04	(13.4)	119	6.18	4.0
44	5.97	(6.0)	82	6.06		120	6.20	6.0
45	6.03	(2.6)	83	6.05	5.9	121	6.15	5.3
46	5.99	11.7	84	6.07	6.8	122	6.18	4.4
47	5.96	18.0	85	6.02	(4.0)	123	6.19	6.0
48	5.93	14.1	86	6.08	13.3	124	6.19	12.2
49	5.93	(18.5)	87	6.06	8.2	125	6.14	16.4
50	6.04	(16.1)	88	6.04	(11.3)	126	6.14	(12.3)
51	5.98	10.3	89	6.12		127	6.16	(16.2)
52	6.14	5.2	90	6.13	2.5	128	5.64	(40.0)
53	6.02	(12.8)	91	6.11	13.3	129	6.22	10.0
54	6.04	(2.0)	92	6.10	12.4	130	6.25	28.9
55	6.03	12.9	93	6.09	(5.4)	131	6.19	2.0
56	6.04		94	6.15	(0.4)	132	6.14	3.5
57	5.99	2.7	95	6.18	(0.4)	133	6.18	(9.9)
58	6.00	1.6	96	6.12	25.0	134	6.29	(44.8)
59			97	6.11	4.0	135	6.22	10.4
60	6.03		98	6.09	2.1	136	6.19	(20.0)
61	6.01	(26.8)	99	6.12	7.5	137	6.28	
62	6.05		100	6.08	(4.0)	138	6.26	
63	6.08	(2.8)	101	6.12	11.2	139	6.21	50.8
64	6.10		102	6.14	7.3	140	6.21	(3.2)
65	6.06	16.0	103	6.11	(5.5)	141	6.29	
66	6.06	(6.9)	104	6.19	(1.6)	142	6.26	2.0
67	6.13	(2.4)	105	6.18	(3.4)	143	6.19	
68	6.11		106	6.15	16.4	144	6.29	
69	6.06		107	6.16	5.5	145	6.31	
70	6.05	12.0	108	6.13	19.2	146	6.14	
71	6.07	4.0	109	6.14	4.1	147	6.22	

６．第４面の調査

(1)　調査の概要（図版23　写真図版20）

当地区全域に及ぶ水田跡を検出した。計452区画を検出した。

(2)　調査の結果（写真図版20・21）

水田跡　当面全域で水田跡を検出した。当地区の調査面積が2,067㎡であることから、2,000㎡強におよぶ水田跡を検出したことになる。

畦　畔　検出した範囲では基本的には同規模で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別は認められない。断面形は蒲鉾形をなし、基底部における幅20㎝、水田面との比高差10㎝を測る。

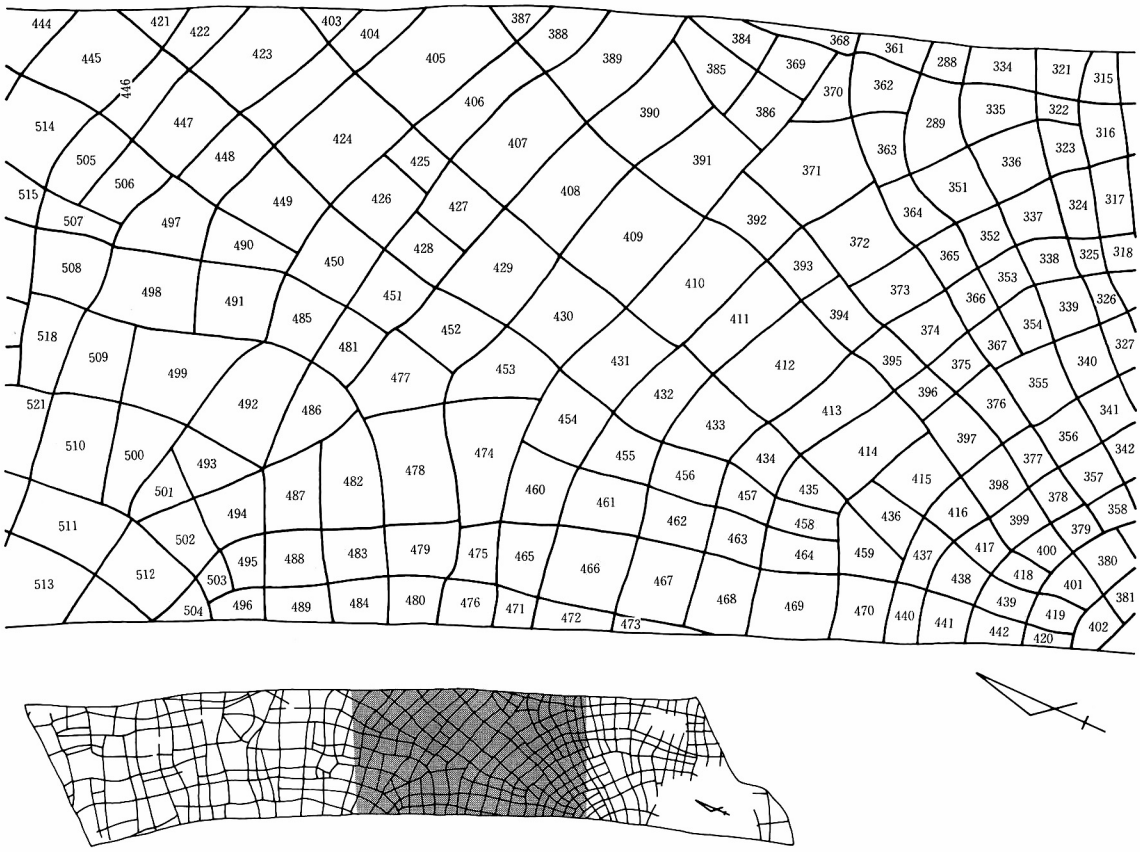
平面形　基本的には方形を指向した、いわゆる小区画水田に分類されるものである。しかし、弧状にのびる畦畔に対して、その弧に対して放射方向に直線的にのびる畦畔が交わっている。したがって、厳密には方形というより台形を呈するものが多く認められる。

面　積　各区画の面積は一定ではなく、狭い区画で0.2㎡、広い区画で10.4㎡と、かなりのバリエーションが認められる。

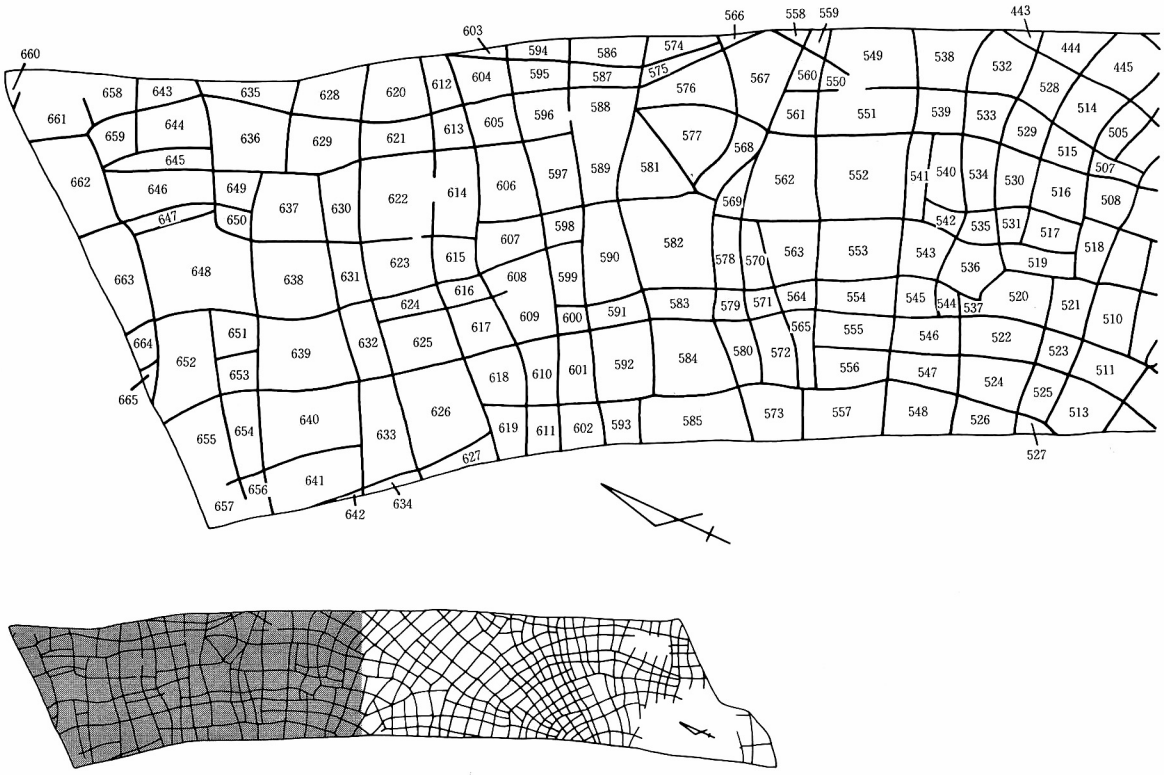
標　高　水田面の標高は、第２節における土層断面の観察結果同様、南側ほど低くなる傾向が認められる。最も高い水田面の標高で5.87ｍ、最も低い水田面の標高で5.45ｍと、42㎝の比高差が認められる。

なお、各水田区画の詳細については、第３表～第６表を参照されたい。

第44図　Ⅰ区第４面　水田跡 (1)



第45図　Ⅰ区第４面　水田跡 (2)



第46図　Ⅰ区第４面　水田跡 (3)

第3表　Ⅰ区第4面　水田跡一覧表 (1)

(　)内は検出面積

No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)
214	5.56	(5.4)	252	5.50	0.8	290	5.51	1.9
215	5.51	(7.8)	253	5.51	1.0	291	5.51	1.5
216	5.55	(1.2)	254	5.50	(1.8)	292	5.57	(1.3)
217	5.54	6.6	255	5.52	(1.1)	293	5.58	1.5
218	5.51	(2.2)	256	5.55		294	5.54	2.0
219	5.50	(1.2)	257	5.50	(1.4)	295	5.51	1.1
220	5.48	(0.8)	258	5.52	0.9	296	5.54	0.8
221	5.53	(0.3)	259	5.52	1.5	297	5.51	6.3
222	5.53	(1.8)	260	5.51	1.7	298	5.52	2.2
223	5.50	1.9	261	5.50	1.8	299	5.51	3.1
224	5.51		262	5.46		300	5.49	2.5
225	5.50	(1.1)	263	5.45		301	5.58	(0.9)
226	5.50	0.4	264	5.50	(1.8)	302	5.57	0.6
227	5.51	0.7	265	5.52	(1.0)	303	5.55	1.2
228	5.52	1.1	266	5.53	(1.8)	304	5.48	0.4
229	5.50	1.4	267	5.56	1.2	305	5.51	0.8
230	5.50	1.2	268	5.53	2.0	306	5.58	(0.9)
231	5.48	1.0	269	5.53	2.3	307	5.58	0.9
232	5.50	(2.1)	270	5.49	1.6	308	5.50	1.5
233	5.52	0.6	271	5.47	4.1	309	5.51	0.8
234	5.52	0.4	272	5.54	(1.3)	310	5.48	1.6
235	5.50	0.9	273	5.56	(1.9)	311	5.53	1.1
236	5.46	0.7	274	5.55	(3.9)	312	5.55	1.5
237	5.48	0.3	275	5.52	1.1	313	5.54	1.3
238	5.50	0.9	276	5.51	2.0	314	5.53	1.8
239	5.48	0.8	277	5.49	1.3	315	5.54	2.4
240	5.46	1.0	278	5.51	1.7	316	5.52	(1.7)
241	5.46		279	5.47	2.5	317	5.58	(0.7)
242	5.51	2.0	280	5.50	(1.2)	318	5.57	0.9
243	5.53	(1.6)	281	5.55	(0.9)	319	5.52	0.9
244	5.50		282	5.54	1.0	320	5.52	0.3
245	5.49	1.2	283	5.55	1.3	321	5.49	0.2
246	5.50	0.3	284	5.54	(0.8)	322	5.52	0.3
247	5.50	0.5	285	5.55	1.3	323	5.59	(1.1)
248	5.51	0.8	286	5.55	5.5	324	5.59	0.3
249	5.50		287	5.53	1.7	325	5.56	0.8
250	5.49	(1.7)	288	5.63	(0.6)	326	5.54	0.8
251	5.49	0.5	289	5.59	1.7	327	5.52	0.2

第４表　Ⅰ区第４面　水田跡一覧表 (2)

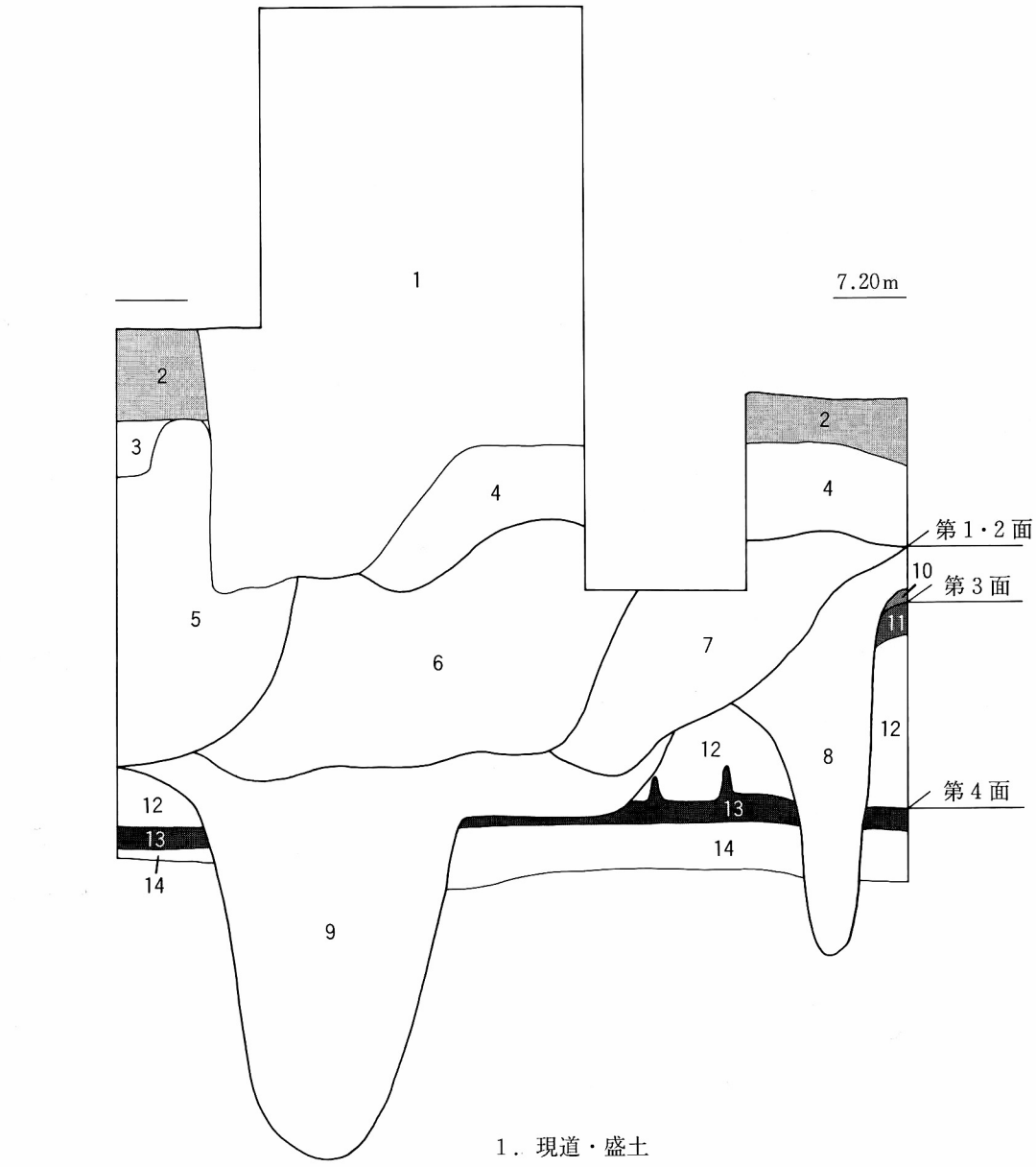
No.	標高（m）	面積（m²）	No.	標高（m）	面積（m²）	No.	標高（m）	面積（m²）
328	5.52	0.5	366	5.58	0.6	404	5.63	(1.2)
329	5.55	0.6	367	5.55	0.5	405	5.62	(5.2)
330	5.56	0.4	368	5.62	(0.2)	406	5.64	2.2
331	5.55	0.5	369	5.63	(1.2)	407	5.64	4.5
332	5.53	0.6	370	5.60	0.8	408	5.63	4.0
333	5.53	0.6	371	5.58	4.5	409	5.62	5.5
334	5.52	0.7	372	5.58	2.6	410	5.61	4.6
335	5.53	(0.4)	373	5.57	1.8	411	5.58	2.6
336	5.62	(1.5)	374	5.56	1.2	412	5.57	5.1
337	5.62	1.4	375	5.56	0.8	413	5.57	2.6
338	5.59	1.6	376	5.56	0.9	414	5.57	3.1
339	5.54	1.1	377	5.40	0.6	415	5.56	1.7
340	5.53	0.7	378	5.53	0.4	416	5.59	0.8
341	5.54	1.0	379	5.52	0.5	417	5.58	0.6
342	5.52	1.1	380	5.52	0.9	418	5.57	0.4
343	5.54	0.8	381	5.54	0.5	419	5.55	0.3
344	5.55	0.8	382	5.55	0.5	420	5.55	(0.2)
345	5.53	0.9	383	5.55	(0.4)	421	5.66	(0.6)
346	5.52	0.8	384	5.62	(0.8)	422	5.66	(0.9)
347	5.53	1.0	385	5.55	2.1	423	5.63	1.4
348	5.53	0.6	386	5.63	1.4	424	5.62	3.8
349	5.54	0.9	387	5.64	(0.3)	425	5.62	0.5
350	5.55	(0.4)	388	5.61	1.4	426	5.64	2.2
351	5.63	(0.6)	389	5.59	(4.1)	427	5.64	1.7
352	5.59	1.7	390	5.57	3.3	428	5.65	1.3
353	5.55	1.3	391	5.60	3.2	429	5.62	4.2
354	5.54	0.8	392	5.61	1.5	430	5.63	3.5
355	5.53	0.7	393	5.59	0.8	431	5.62	2.9
356	5.56	0.7	394	5.56	0.7	432	5.62	2.1
357	5.52	1.6	395	5.55	0.7	433	5.60	2.5
358	5.53	1.0	396	5.59	0.6	434	5.59	0.9
359	5.54	0.8	397	5.54	1.4	435	5.57	0.8
360	5.50	0.4	398	5.54	1.0	436	5.58	1.2
361	5.69	(0.6)	399	5.54	0.7	437	5.56	0.8
362	5.62	1.3	400	5.56	0.3	438	5.54	0.9
363	5.60	0.5	401	5.56	0.5	439	5.55	0.7
364	5.58	0.9	402	5.56	0.3	440	5.57	(0.7)
365	5.56	0.9	403	5.66	(0.3)	441	5.58	(1.0)

第5表　Ⅰ区第4面　水田跡一覧表 (3)

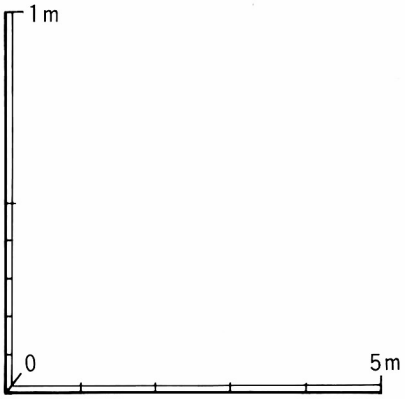
No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)
442	5.58	(0.7)	480	5.67	(1.1)	518	5.69	1.6
443	5.71	(0.4)	481	5.63	1.1	519	5.71	1.5
444	5.69	(2.5)	482	5.66	3.0	520	5.70	3.7
445	5.71	4.7	483	5.68	1.2	521	5.71	2.5
446	5.67	1.3	484	5.69	(1.2)	522	5.71	4.1
447	5.67	2.7	485	5.64	1.7	523	5.73	1.3
448	5.60	1.7	486	5.66	1.7	524	5.70	3.5
449	5.65	2.7	487	5.66	1.9	525	5.70	2.0
450	5.64	2.4	488	5.67	1.4	526	5.72	(2.8)
451	5.62	1.5	489	5.69	(1.0)	527	5.73	(0.4)
452	5.64	2.2	490	5.65	1.1	528	5.70	2.4
453	5.61	2.5	491	5.65	2.5	529	5.73	1.7
454	5.60	2.3	492	5.67	4.1	530	5.71	2.1
455	5.60	1.4	493	5.68	1.1	531	5.71	0.7
456	5.60	1.5	494	5.70	1.5	532	5.73	3.6
457	5.58	0.8	495	5.68	0.6	533	5.71	1.8
458	5.57	0.7	496	5.65	(0.6)	534	5.69	2.1
459	5.54	1.1	497	5.66	2.3	535	5.70	0.8
460	5.61	1.8	498	5.67	3.5	536	5.71	3.3
461	5.59	2.0	499	5.68	3.6	537	5.70	0.3
462	5.58	1.6	500	5.68	1.7	538	5.74	(5.3)
463	5.58	1.0	501	5.66	0.7	539	5.73	2.3
464	5.57	1.2	502	5.65	1.3	540	5.73	2.6
465	5.62	1.2	503	5.69	0.3	541	5.75	1.4
466	5.62	3.0	504	5.67	(0.4)	542	5.70	0.6
467	5.61	2.8	505	5.65	1.7	543	5.72	3.0
468	5.60	1.9	506	5.67	1.4	544	5.70	0.7
469	5.58	2.7	507	5.68	0.4	545	5.73	1.9
470	5.58	1.6	508	5.72	2.0	456	5.73	3.2
471	5.63	0.5	509	5.67	1.9	547	5.73	3.1
472	5.64	(0.8)	510	5.72	3.2	548	5.75	(5.4)
473	5.62	(0.1)	511	5.69	2.1	549	5.74	(7.2)
474	5.60	3.9	512	5.68	(1.0)	550	5.73	0.8
475	5.63	0.8	513	5.69	(4.3)	551	5.73	5.9
476	5.66	(1.0)	514	5.69	3.2	552	5.78	10.2
477	5.62	2.6	515	5.68	1.3	553	5.74	6.5
478	5.63	3.8	516	5.69	2.7	554	5.73	3.2
479	5.75	1.5	517	5.68	1.7	555	5.78	3.4

第６表　Ⅰ区第４面　水田跡一覧表 (4)

No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)
556	5.77	3.7	593	5.74	(2.3)	630	5.77	3.3
557	5.72	(6.3)	594	5.76	(1.2)	631	5.76	4.2
558	5.76	(0.2)	595	5.78	1.7	632	5.75	3.2
559	5.75	(0.4)	596	5.76	3.0	633	5.75	5.9
560	5.75	1.4	597	5.77	4.1	634	5.78	(1.0)
561	5.74	2.1	598	5.77	1.6	635	5.86	(2.2)
562	5.75	7.5	599	5.79	2.3	636	5.83	7.2
563	5.76	4.1	600	5.78	0.7	637	5.80	6.5
564	5.78	0.8	601	5.75	3.0	638	5.79	8.5
565	5.76	1.6	602	5.77	2.6	639	5.79	9.1
566	5.82	(0.4)	603	5.80	(0.2)	640	5.76	9.2
567	5.81	6.3	604	5.76	2.6	641	5.77	(6.8)
568	5.83	2.3	605	5.78	3.0	642	5.78	(0.4)
569	5.77	1.2	606	5.76	5.4	643	5.85	(2.0)
570	5.77	1.8	607	5.77	3.3	644	5.85	3.8
571	5.79	1.0	608	5.73	1.7	645	5.84	1.9
572	5.72	3.4	609	5.73	3.9	646	5.82	5.2
573	5.77	(4.5)	610	5.74	2.6	647	5.81	0.8
574	5.87	(2.2)	611	5.78	(2.1)	648	5.78	12.7
575	5.83	0.7	612	5.81	1.6	649	5.84	1.8
576	5.83	4.9	613	5.81	1.7	650	5.81	0.8
577	5.82	6.0	614	5.75	5.4	651	5.78	2.3
578	5.76	5.7	615	5.77	2.3	652	5.79	7.9
579	5.78	0.9	616	5.75	1.1	653	5.76	1.5
580	5.75	2.4	617	5.77	3.6	654	5.78	2.9
581	5.79	5.1	618	5.75	4.2	655	5.79	6.6
582	5.78	10.4	619	5.74	(2.4)	656	5.78	(1.1)
583	5.74	2.2	620	5.82	(5.2)	657	5.78	(2.0)
584	5.76	8.5	621	5.82	3.1	658	5.87	(2.7)
585	5.72	5.0	622	5.78	9.3	659	5.86	1.5
586	5.79	(3.0)	623	5.76	4.9	660	5.83	(0.6)
587	5.76	1.9	624	5.76	1.7	661	5.85	(5.7)
588	5.76	3.3	625	5.77	5.4	662	5.82	(7.1)
589	5.77	5.1	626	5.73	10.0	663	5.84	(7.0)
590	5.78	6.2	627	5.77	(2.2)	664	5.80	(1.0)
591	5.76	1.6	628	5.85	(4.1)	665	5.80	(0.1)
592	5.77	6.0	629	5.81	5.1			



1．現道・盛土
2．耕作土
3．極細砂～細砂　2.5Y 6/2　灰黄
4．極細砂～細砂　2.5Y 6/2　灰黄
5．SD22埋土
6．SD15埋土
7．細砂～極細砂（洪水砂）　2.5Y 5/2　暗灰黄
8．SD14埋土
9．SD46埋土
10．極細砂（土壌層Ⅰ）　10YR 4/3　にぶい黄褐
11．シルト質極細砂（土壌層Ⅱ）　10YR 3/2　黒褐
12．極細砂（洪水砂）　10YR 5/2　灰黄褐
13．シルト質粘土（土壌層Ⅲ）　N 4/0　灰
14．粘土（土壌層）　N 3/0　暗灰



耕土　土壌層Ⅰ　土壌層Ⅱ　土壌層Ⅲ（水田土壌）

第47図　Ⅱ区基本土層

第３節　Ⅱ区の調査

１．調査の概要

(1) 基本層序

はじめに　当地区においても、第３章第１節で報告した基本層序と同じである（第47図）。ただし、後述するように、当地区は幅６ｍの市道（大野美乃利線）部分の調査であることから調査範囲が限られている。加えて、第１面と第２面で検出した溝状遺構が第４面よりも深くまで掘り込まれている。このため、Ⅰ区のような良好な状態で各土壌層を検出することはできなかった。ただし、溝状遺構の影響がおよばなかった所では、各土壌層が認められた。

現耕作土　当地区の大半が市道部分の調査であるため、調査区の北東側と南西側でわずかに認められた。当土壌層と土壌層Ⅰの間には灰黄色極細砂～細砂からなる旧水田土壌層と床土の互層が認められた。この互層は多くて５組確認することができた。

土壌層Ⅰ　にぶい黄褐色極細砂１層からなる。

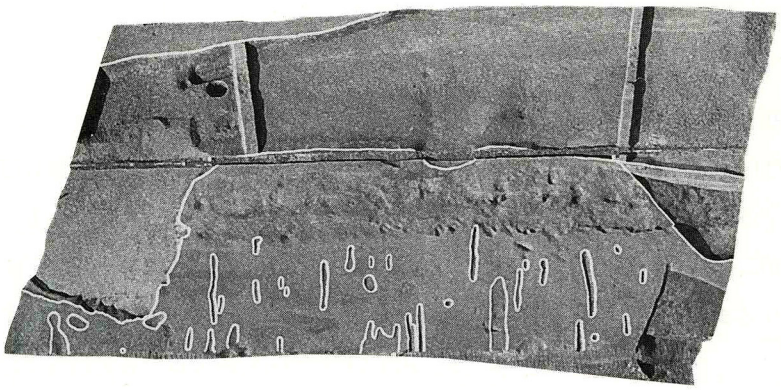
土壌層Ⅰの下層は、黄褐色極細砂層が認められた。基本的には土壌層Ⅰと同一堆積によるものと考えられる。この層の堆積は厚くはなく、ところによっては全く認められない箇所も認められた。

土壌層Ⅱ　黒褐色シルト質極細砂からなる水田土壌層である。

土壌層Ⅱの下層は灰黄褐色極細砂１層からなる。土壌層Ⅱと同一の堆積によると考えられる層で、その層相から洪水による堆積と考えられる。土壌層Ⅱも含めて約55㎝の堆積が認められる。

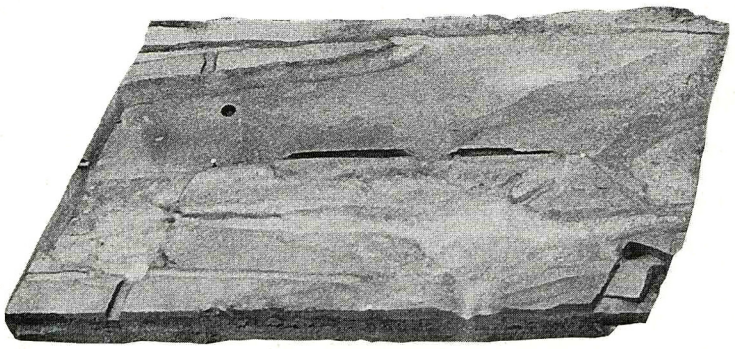
土壌層Ⅲ　灰色シルト質粘土からなる水田土壌層である。

土壌層Ⅲの下層も土壌化が顕著な暗灰色粘土で、土壌層Ⅲと同一堆積によるものと考えられる。この層が水田土壌であるのかについては、第４章第８節のプラントオパール分析の結果を参照されたい。



第1面

第2面



第3面

第48図　Ⅱ区の遺構

(2)　土壌層と遺構の検出

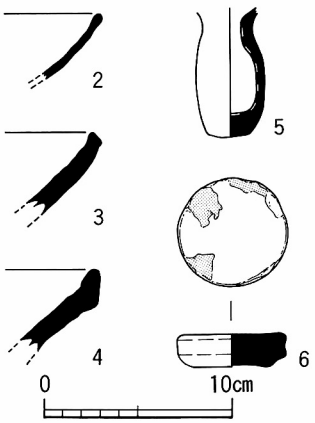
第１面から第４面の４面にわたり遺構を検出している。

第１面　土壌層Ⅰの上面で検出した遺構で、その埋土の違いから、第１面(1)と第１面(2)とに分けて遺構を検出した。

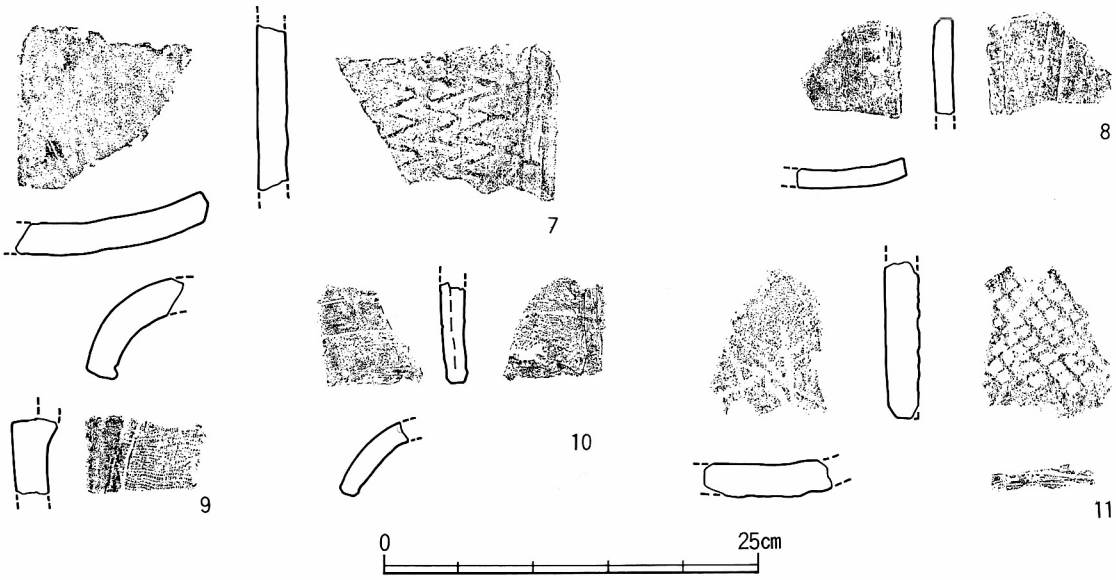
第１面(1)　灰色系の埋土を主体とする遺構である。鋤溝と奈良時代～平安時代にかけての溝（SD15）を検出している。鋤溝については、Ⅰ区で検出した鋤溝と一連のものと考えられる。

第１面(2)　褐灰色系の埋土を主体とする遺構で、溝状遺構を検出している。出土遺物から奈良時代と考えられる。

ただし、当遺構面を検出する際に出土した土器をみると、平安時代後期から鎌倉時代にかけてのもの（第49図）も少なからず認められる。瓦についても、時期的にほぼ当該期に位置付けられる。したがって、当遺構面で検出した溝状遺構は、この時期に埋没した可能性も考えられる。



第49図　Ⅱ区第１面(2)出土土器

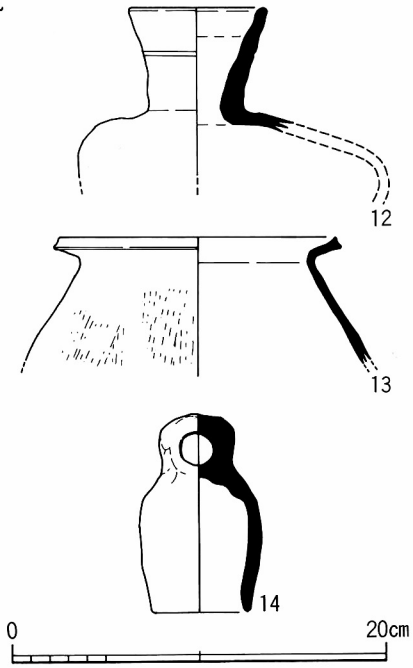


第50図　Ⅱ区第１面(2)出土瓦

第２面　土壌層Ⅰの下面、つまり土壌層Ⅰを掘り下げ土壌化の認められないレベルで検出している。当面においても、検出した遺構は溝状遺構と柱穴がある。奈良時代の土器も出土しているが、時期を明確にできるのは弥生時代中期から後期の遺構である。

第３面　土壌層Ⅱの上面で検出している。Ⅰ区第３面(2)に対応する面である。水田跡のみ検出している。

第４面　土壌層Ⅲの上面で検出している。Ⅰ区第４面に対応する面である。水田跡のみ検出している。



第51図　Ⅱ区第２面出土土器

２．第１面(1)の調査

(1)　概　要（図版24　写真図版22）

検出した遺構は鋤溝と溝状遺構に限られる。

鋤溝　全て一定方向を示すものである。後述するSD15を検出した範囲においては認められなかった。このため両者の前後関係については調査においては明確にできなかった。

溝　SD15の１条のみである。調査区やや北西側で、ほぼ直線的にのびる溝である。

(2)　調査の結果

鋤　溝（図版24）

検出状況　当遺構面の大半をSD15が占めているが、これ以外の箇所で検出した。小規模な溝がほぼ同一方向に認められるもので、小規模な溝は楕円形に近い。

形状・規模　北西－南東方向にのびるほぼ直線的な溝で、N48°Wを指向する。横断面はU字形を呈する。検出した長さは、10cmから2.57m以上とバリエーションが認められる。検出面における幅は20～60cmと一定ではないが、約30cmがほぼ平均的な規模である。最深部における検出面からの深さは、深くても10cmである。

出土遺物　埋土内からは遺物の出土は認められなかった。

時　期　埋土から判断して、鎌倉時代以降と考えられる。

ＳＤ１５（図版24）

検出状況　Ⅱ区の北東辺から南西辺に向かって調査区を縦断するように流れ、南西部ではかなり幅が広まり、淀みあるいは溜まり状になっている。また、北東部でも切り合いはあるものの溜まり状の部分がみとめられる。Ⅱ区のおよそ半分の面積がこの溝で占められている。

形状・規模　溝の方向は北東から南西である。長さは25.1mが検出された。幅は検出面で9.8～4.35m、溝底で8.25～3.40mを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは77cmである。溝底の標高は北東端で6.25m、南西端で5.98mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　大きく３つに分けられ、最上層の１層は細砂を含むオリーブ灰色シルト、４～６層は灰～黄灰色シルト～細砂のラミナ、２・３層及び７～９層はオリーブ灰～灰色シルトである。この溝は第11図にみられるように長尾と池ノ内の小字の境界に当たっている。条里に伴うもので、近世あるいは道路舗装以前まで存続していた水路と考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　136～139と141は須恵器である。136は坏蓋で、内面に薄く墨が付着しており、転用硯の可能性がある。137は坏Ａである。口縁部が直線的に広がるタイプである。138は椀の底部で、139は壺の底部でいずれも高台が付く。なお139の内面に自然釉が付着している。141は把手であり、器種としては甕が考えられる。

土師器　140と142は土師器である。140は皿である。暗文は無く、全体に煤けている。142は鉢である。口縁端部を除き、全体に横方向の板ナデを施している。

時　期　出土遺物から８世紀後半に掘削され、11世紀以降まで存続したものと考えられる。

３．第１面(2)の調査

(1)　概　要（図版25　写真図版23）

ほぼ直線的にのびる２条の溝を検出したのみである。両溝とも途中で直交方向に分岐しており、この箇所においてSD19がSD20を切っている。

(2)　調査の結果

ＳＤ１９（図版25　写真図版112）

検出状況　Ⅱ区の南東半部をおおよそ調査区の長辺に平行して流れる形で検出された。SD20を切っている。

形状・規模　溝の方向は北東から南西であるが、長さは19.5ｍが検出された。幅は分岐している部分を除き、検出面で0.75～3.35ｍ、溝底で0.45～2.50ｍを測る。中程で幅が広まり、かつ多方向に分岐している。断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは29㎝である。溝底の標高は北東端で6.17ｍ、南西端で6.13ｍであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　埋土は３層に分けられ、上層から褐灰色シルト混じり細砂、灰黄褐色シルト混じり細砂、褐灰色シルトであり、いずれもいわゆる洪水砂である。

出土遺物　出土した遺物のうち、148・149・152が土師器であり、それ以外は須恵器である。

143は坏Ａで焼きがやや不良で、144は皿で内外面に火ダスキがみとめられる。いずれも比較的浅手のものである。145～149は高台のある底部である。145は壺の可能性がある。145・146の内面には多方向の仕上げナデが施されており、147も仕上げナデが認められる。148の外面には赤色顔料が塗られているようである。149は椀の高台で、断面は特徴的な三角形である。150は壺の口縁部で釉のため調整は不明である。151は平底の甕の底部であるが、叩きは認められず、ナデで仕上げられている。152は土師質の蛸壺で釣鐘形のタイプである。

時　期　出土遺物から、奈良～平安時代（８～10世紀）と考えられる。

ＳＤ２０（図版25）

検出状況　Ⅱ区の南東半部を調査区の長辺に平行して流れる形で検出された。SD19に切られている。

形状・規模　溝の方向は北東から南西である。長さは16.6ｍが検出された。幅は検出面で40㎝～1.5ｍ、溝底で25～40㎝を測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは９㎝である。溝底の標高は北東端で6.34ｍ、南西端で6.29ｍであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　埋土は断面図では２層に分層し、上層は黄灰色細砂、下層は褐灰色シルトである。他の部分では埋土は１層で褐灰色シルト質極細砂であった。

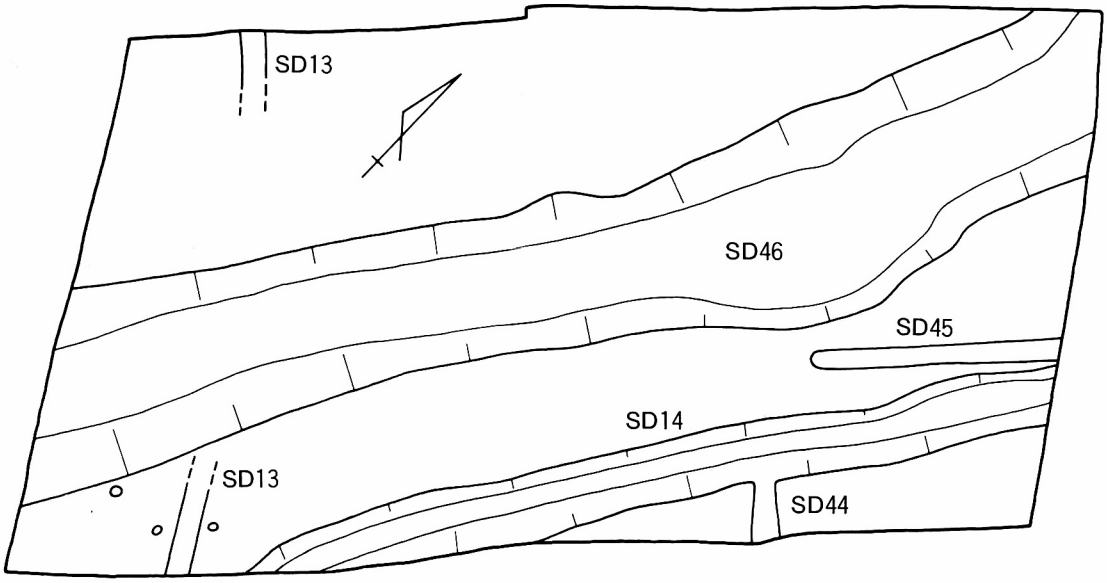
出土遺物　全く出土していない。

時　期　奈良時代以前と考えられる。

４．第２面の調査

(1)　概　要（図版26　写真図版24）

Ⅱ区第２面では、調査区を斜めに横切る溝SD46、それとほぼ平行に流れる溝SD14が主な遺構である。ほかに小規模な溝SD44・SD45、Ⅰ区から続く溝SD13および３個の柱穴が検出されている。



第52図　Ⅱ区第２面の遺構

(2)　調査の結果

ＳＤ４４

検出状況　Ⅱ区の南東辺でSD14から分岐する形で検出された（第52図）。

形状・規模　溝の方向は北東から南西である。長さは1.6ｍが検出された。幅は検出面で40～65㎝、溝底で34～40㎝を測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは28㎝である。溝底の標高は北西端で6.12ｍ、南東端で6.15ｍを測り、南東方向から北西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　２層からなり、上層は灰黄褐色シルト混じり細砂、下層は褐灰色細砂混じり極細砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　判断できない。

ＳＤ４５

検出状況　Ⅱ区の北東辺に向かって流れる形で検出された（第52図）。SD14の北西にある。

形状・規模　溝の方向は北東から南西であるが、長さは6.20ｍが検出された。幅は検出面で50㎝～60㎝、溝底で25～30㎝を測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12㎝である。溝底の標高は北東端で6.06ｍ、南西端で6.11ｍを測り、南西方向から北東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　１層からなり、褐灰色細砂混じりシルトである。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　判断材料を欠くため、明確にできない。

ＳＤ４６（図版26～32　写真図版25・113～118・177・178）

検出状況　Ⅱ区の北コーナーから南コーナー付近に向かい、調査区全体を大きく斜めに横切って流れる形で検出された（第52図）。

形状・規模　溝の方向は北東から南西である。長さは27.2ｍが検出された。幅は検出面で3.4～5.15ｍ、溝底で1.75～3.35ｍを測る。断面は浅いＵ字形を呈し、検出面からの深さは1.40ｍである。溝底の標高は北東端で4.91ｍ、南西端で4.64ｍであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　８層ないし11層からなるが、３つないし４つに大分することができる。１層ないし１～３層は灰色シルトあるいは褐灰色のシルト（またはラミナ）で最初はこの部分のみを溝と認識していた。それ以下は基本的にはラミナで炭化物や植物遺体を含んでいる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　弥生時代中期と後期の土器が出土している。

中　期　壺・甕・複合土器・鉢・高坏・蛸壺・ミニチュアが出土している。

壺　広口壺・直口壺・無頸壺などが出土している。

広口壺　直立する頸部に対して口縁部が外反し、端部を上下方向に拡張するタイプを基本とする。153は、口縁端部に５条の櫛を原体とする簾状紋が施されている。簾状紋の幅は７㎜である。体部には、いずれも５条からなる櫛描直線紋２帯と櫛描波状紋３帯が施文されている。154・155・157の口縁端部には、櫛描波状紋が施文されており、155の頸部には刺突紋が認められる。156は体部片であるが、12条からなる櫛描直線紋と櫛描波状紋が施文されている。

直口壺　体部に対して口縁部が斜上方にのびるもの（165～170）と、直口するもの（171・172）の２タイプが認められる。両タイプとも頸部から口縁部にかけて凹線紋が施文されている。

166は肩部に把手が付くもので、頸部には突帯を貼り付けたあと、その上にキザミ目が施されている。167は、口縁部と頸部の凹線紋の下側に、それぞれヘラ先によるキザミ目が施されている。また、168の頸部の凹線紋の下側にも、同様のキザミ目がわずかに認められる。

無頸壺　脚が付くタイプ（173～177）と付かないタイプ（178～180）とが認められる。前者は、体部外面をヘラ磨きにより丁寧に仕上げられているのに対して、後者はハケもしくはナデ調整により仕上げられている。

底　部　図化しなかったものを含めて比較的多く出土している。調整が観察できる個体はいずれも、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。184の内面は、縦方向のヘラ削りの後、ハケ調整により仕上げられ、上部には煤の付着が認められる。また187は、底部中央を径約２㎝の穿孔が認められるが、穿孔後は未調整となっている。

その他　188は、無頸壺のミニチュアである。径５㎜の紐穴が２箇所に認められる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

甕　　基本的な形態は同じであるが、体部外面中位にキザミ目を施すもの（200～203）と施さないもの（189～199）とが認められる。

前者は、大型（200・201）・中型（202）・小型（203）の3タイプに分類できる。また、キザミ目の施文方法も、一方向に施すものと、201のように綾杉状に施すものとが認められる。また203のキザミ目は不揃いで、キザミ目そのものの長さも短い。

後者も、大型（189～191）・中型（192～196）・小型（197～199）の3タイプが認められる。

底部は、内面をナデ調整により仕上げるものと、縦方向のヘラ削りにより仕上げるものの2タイプが認められる。いずれも、器壁が薄く仕上げられている。

複合土器　215の1個体である。口縁部がわずかに残存するのみである。口縁部下端に断面三角形の突帯が貼り付けられ、その外面にはキザミ目が施されている。

鉢　　把手付台付鉢・底部・ミニチュアが出土している。

把手付　体部と把手のみ残存する。体部は内外面とも丁寧なヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は強い摘むようなナデ調整が施されているため、外面は凹線状を呈する。

底　部　2個体出土している。2個体とも底部から体部下半にかけての残存で、底部を指抑えにより成形している。

ミニチュア　219の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。内面にヘラ先で整形した際のヘラ先圧痕が認められる。

高　坏　　いわゆる木器形高坏と皿形高坏とからなり、後者のほうが量的に多い。

木器形　法量的に、大型のもの（220）と小型のもの（221・222）の2タイプに分類できる。

皿　形　当タイプで、調整が観察できるものはすべて、内外面とも横方向の丁寧なヘラ磨きにより仕上げられている。ただし233は、体部外面を縦方向の弱いヘラ削り、内面を縦方向のハケ調整後、ヘラ磨きで仕上げられているが、その範囲は口縁部に限られる。

当タイプは体部が皿形を呈するものであるが、その形態により、浅いタイプと深いタイプに分類できる。また、口縁端部の形態においてもバリエーションが認められる。

脚　部　長脚のものと短脚のものとが認められる。長脚・短脚とを問わず、体部との接合部が残存するものは、239を除いてはすべて円板充塡法によっている。

234は、体部との接合部に8条の、脚中央部に11条の凹線紋が施文され、両者の中間部に7ヶ所キザミ目が施されている。また脚下半には8ヶ所に円孔が穿たれており、各円孔の間にキザミ目が8ヶ所に施されている。円板充塡法によらない239には、体部との接合部と脚中央部にヘラ描沈線紋が施されている。

蛸　壺　　いずれも飯蛸壺に分類されるものである。各個体とも指オサエ・ユビナデにより整形されている。体部の形態において、砲弾形をなすものとコップ形をなすものとが認められる。前者は径約1.5㎝前後の円孔を一つ穿つのに対して、後者には円孔は認められない。ただし、後者のタイプについては完存するものがないため、円孔が穿たれるものもある可能性が考えられる。

後　期　　蓋・甕・鉢・紡錘車が出土している。

蓋　　やや突出する頂部をもち、体部は直線的に開く。調整は内面が横方向のケズリで、外面

は不明である。

甕　タタキが確認できるもの（261・264）と確認できないもの（263）の２つにわけることができる。263は内外面ともハケ目調整の後、ナデが施されている。264は底部と体部で調整が異なっており、底部外面が斜めのタタキ、内面が縦方向のハケ目調整であるのに対し、体部は外面が横方向のタタキ、内面が横方向のハケ目である。

鉢　焼成前に開けられた孔を有する有孔鉢である。全体に磨滅しており、タタキの痕跡も明確に残っていないが、右上がりのタタキがわずかに観察できる。

他　紡錘車が出土している。平面形は円形に近く、直径４㎜の円孔が穿たれる。

石　器　Ｓ48・Ｓ49はサヌカイト製の石鏃である。Ｓ48は欠損のため基部の形状は不明であり、Ｓ49は凹基式の石鏃で、やや小型で細手に属するものである。長さ2.2㎝、幅1.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.8ｇ。

Ｓ50は磨製石包丁で、おそらく中央付近で折れたものである。孔は２つで、刃は片刃で直線刃である。美しい緑灰色を呈する良質の石材は、緑色片岩である。

Ｓ51・Ｓ52は砥石である。Ｓ51は平面形が台形の定型化された砥石であるが、下端は折れている。石材は凝灰質砂岩である。Ｓ52は現存の平面形は長方形に近い形状である。焼けており、鋳型の可能性もある。上端および図化した裏面は欠損している。石材は流紋岩質凝灰岩である。

Ｓ53・Ｓ54は磨石である。Ｓ53は平面形は楕円形で、全体の形状は円筒形の上下をまるく膨らませた形である。側面に著しい擦痕がある面があり、側面を利用して研磨を行ったものと思われる。長さ5.5㎝、幅4.8㎝、厚さ3.1㎝、重さ114.8ｇ。石材は、石英安山岩である。Ｓ54は平面・側面とも楕円形で、いわゆる円礫をそのまま利用したものである。長さ4.45㎝、幅3.9㎝、厚さ3.4㎝、重さ79.5ｇである。石材は流紋岩質火砕岩である。

時　期　弥生時代中期後半以降に埋没していったものと考えられる。

ＳＤ１４（写真図版26）

概　要　調査区の南東隅で検出した。北東－南西方向にほぼ直線的にのびる、Ⅰ区第２面から続く溝である。北東端は調査区外までのびている。Ⅱ区で21ｍ検出した。SD44と直交しているが、調査では切り合い関係は明確にできなかった。

なお、溝の規模・埋没状況等については、Ⅰ区で報告した通りである。第１節（50ページ）を参照されたい。

５．第３面の調査

(1)　概　要（図版33　写真図版26）

当遺構面全域にわたって水田跡を検出した。Ⅰ区第３面(2)から続くものである。

(2)　調査の結果

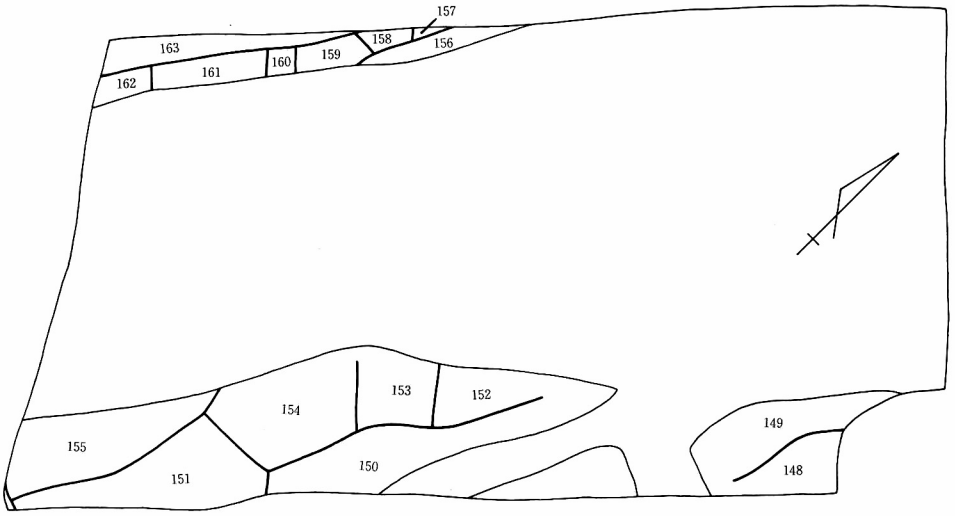
水田跡　第３面は上面の遺構により残存している面積がごくわずかであったが、その全域で水田跡を検出した。その面積は1,096㎡に及ぶ。

畦　畔　畦畔は一部検出幅46㎝と広い部分がある。他は基本的には同規模の幅で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別はないものと思われる。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で20㎝前後、底で30～40㎝を測る。水田面からの高さは３～９㎝である。

平面形　水田の区画は一区画が完存するものがほとんどなく、規模や平面形は不明であるが、おそらく台形のものが主体であろう。

標　高　水田の標高は残存部分が少ないため傾向がつかみにくいが、南ほど低くなる傾向がみられる。最も高い水田面で6.36ｍ、最も低い水田面で6.20ｍと16㎝の比高差が認められる。

なお、各区画の詳細については、第７表を参照されたい。



第53図　Ⅱ区第３面　水田跡

第７表　Ⅱ区第３面　水田跡一覧表

（　）内は検出面積

No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）
148	6.36		154	6.25	(5.8)	160	6.31	(0.1)
149	6.36		155	6.20	(5.2)	161	6.30	(0.5)
150	6.27		156	6.34		162	6.30	(0.5)
151	6.25	(7.4)	157	6.32		163	6.30	
152	6.31	(2.0)	158	6.34	(0.3)			
153	6.31	(2.8)	159	6.33	(0.6)			

６．第４面の調査

(1)　概　要（図版33　写真図版27）

当遺構面全域にわったて水田跡を検出した。Ⅰ区第４面に対応するものである。

(2)　調査の結果

水田跡　第４面は第３面より残存する面積が広く、そのほぼ全域で水田跡を検出した。その面積は1,096㎡に及ぶ。

畦　畔　畦畔は基本的には同規模の幅で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別はこの範囲では認められない。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で15～20㎝、底で40㎝前後である。水田面からの高さは２～４㎝である。

平面形　水田の区画は比較的正方形や長方形に近いものが多く、全体に整った印象を与える。これは、畦畔がほぼ直交し、交点でくいちがう場合が少ないためである。

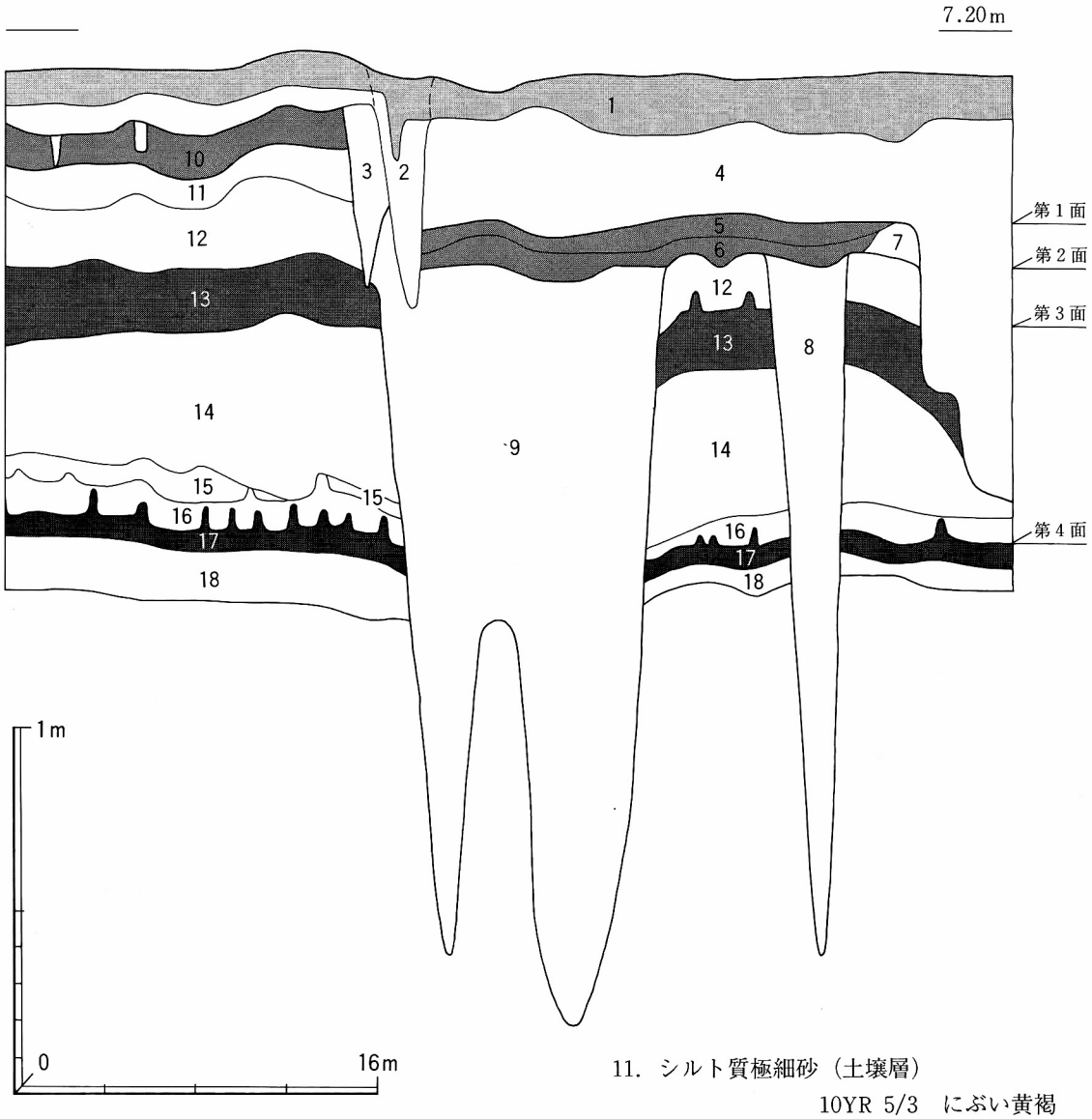
面　積　各区画の面積は比較的揃っており、狭い区画で3.2㎡、広い区画で13.5㎡、平均で7.44㎡程度である。

標　高　水田面の標高は、南側ほど低くなる傾向がみとめられる。最も高い水田面で5.84ｍ、最も低い水田面で5.72ｍと12㎝の比高差がみとめられる。

第54図　Ⅱ区第４面　水田跡

第８表　Ⅱ区第４面　水田跡一覧表　　(　)内は検出面積

No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）	No.	標高（m）	面積（㎡）
665	5.78	(4.8)	678	5.82	8.0	691	5.78	(3.8)
666	5.85	(1.7)	679	5.81	(1.1)	692	5.70	7.5
667	5.80	(5.3)	680	5.76	(3.6)	693	5.71	(4.9)
668	5.81	(6.3)	681	5.75	(7.0)	694	5.77	(6.9)
669	5.85	(1.5)	682	5.73	(1.9)	695	5.78	(9.9)
670	5.77		683	5.77	(3.0)	696	5.74	(0.8)
671	5.77	(0.4)	684	5.79	13.5	697	5.71	(4.4)
672	5.80	3.2	685	5.81	(4.0)	698	5.74	7.3
673	5.84	4.6	686	5.78	(4.7)	699	5.76	(1.4)
674	5.85	(2.0)	687	5.71	8.0	700	5.73	
675	5.80	(2.2)	688	5.71	(2.4)	701	5.72	
676	5.79	(8.0)	689	5.76	(3.9)	702	5.74	(1.5)
677	5.77	(1.7)	690	5.79	(6.9)			



1．耕作土
2．シルト質極細砂　5Y 6/1　灰
3．SD16埋土
4．シルト質極細砂と極細砂の互層
5．シルト質極細砂（土壌層Ⅰ）　10YR 5/2　灰黄褐
6．シルト質極細砂（土壌層Ⅰ）　10YR 6/2　灰黄褐
7．極細砂質シルト（土壌層）　10YR 5/1　褐灰
8．SD47埋土
9．SD48埋土
10．シルト質極細砂（土壌層Ⅰ）　10YR 4/2　灰黄褐
11．シルト質極細砂（土壌層）　10YR 5/3　にぶい黄褐
12．シルト質細砂　10YR 6/4　にぶい黄橙
13．シルト質極細砂（土壌層Ⅱ）　10YR 4/2　灰黄褐
14．シルト質細砂（洪水砂）　10YR 7/4　にぶい黄橙
15．シルト質極細砂　10YR 7/4　にぶい黄橙
16．シルト質極細砂（水田土壌）　2.5Y 7/1　灰白
17．シルト質粘土（土壌層Ⅲ）　N 3/0　暗灰
18．粘土（土壌層）　N 3/0　暗灰

耕土　土壌層Ⅰ　土壌層Ⅱ　土壌層Ⅲ（水田土壌）

第55図　Ⅲ区基本土層

第４節　Ⅲ区の調査

１．調査の概要

(1) 基本層序

当地区においても、第３章第１節で確認した基本層序が認められた（第55図）。上から、現耕作土、土壌層Ⅰ、土壌層Ⅱ、土壌層Ⅲの各土壌層が確認でき、各土壌層間は間層によって分離している。

現耕作土　一見したところ平坦であるが、当地区の北側を鍵形に流れる用水路を境に、その北東側では若干高くなる傾向が認められる。

当土壌層の下層は、灰色極細砂と灰黄色シルト質極細砂の互層となっている。前者が水田土壌、後者がその床土に対応する。後述するように、土壌層Ⅰが上記の用水路を境として北側が明確な段差をもって高くなっている。このため、互層は用水路より北側では１層確認できるのみであるのに対して、用水路より南側では多い箇所では５層確認できる。

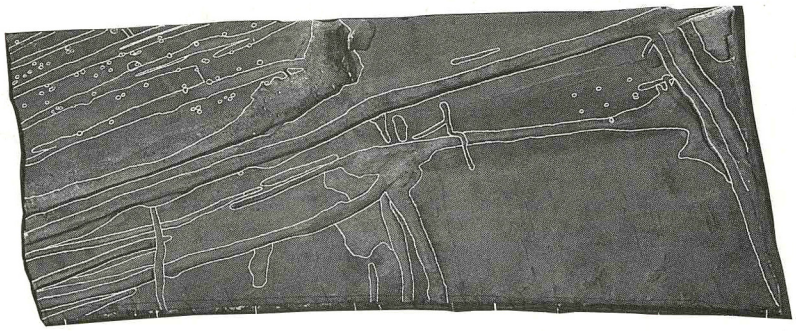
土壌層Ⅰ　灰黄褐色シルト質極細砂からなる。南側においては２層からなるが、堆積構造上は顕著な差は認められなく、土壌化の度合いの差によるものと考えられる。先述したように、用水路を挟んだ北側と南側で明確な段差が認められる。その規模は約30㎝にも及ぶ。ただし、当土壌層が堆積当初からこのような段差があったのではなく、北側から南側への傾斜地に対して、その傾斜の最も顕著な箇所に用水路を設け、かつその両側を平坦化させようとした結果と考えられる。

当土壌層の下層は、用水路より北側に厚く、南側に薄く堆積している。これは、用水路より南側を平坦化させるための削平による結果と考えられる。北側はにぶい黄褐色シルト質極細砂、にぶい黄橙色シルト質細砂の２層が、南側はにぶい黄橙色シルト質細砂１層が堆積している。にぶい黄褐色シルト質極細砂については、若干の土壌化が認められる。

土壌層Ⅱ　灰黄褐色シルト質極細砂からなる。当土壌層は第２面で検出したSD48により切られている。そして、この溝を境に、北側と南側とでは約15㎝ほどのレベル差が認められる。加えて、この溝の南側は水田土壌になっている。これは、当層の水田化にあたっては、平坦化の必要があり、この結果、当初北側から南側へ傾斜していた当層のうち、水田化する箇所を中心に削平を伴う平坦化がなされたためと考えられる。

当土壌層の下層は約40～50㎝の厚みをもつにぶい黄橙色シルト質砂の堆積が認められる。この層は洪水に起因する堆積層である。

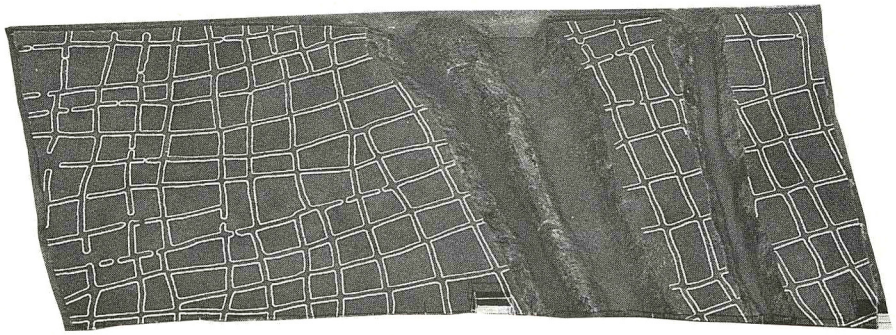
土壌層Ⅲ　暗灰色シルト質粘土からなる水田土壌層である。当層の下層についても土壌化した暗灰色粘土からなる。



第１面

第２面

第３面



第４面

第56図　Ⅲ区の遺構

(2)　土壌層と遺構の検出

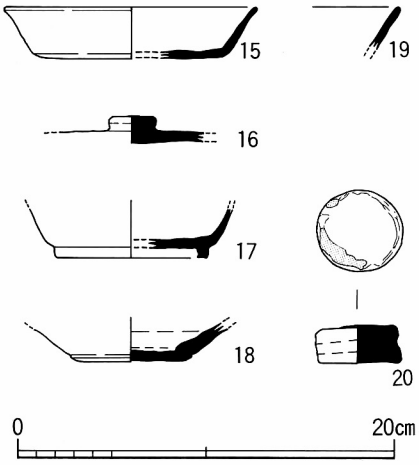
当地区においても、第１面から第４面の４面にわたって遺構を検出している。

第１面　土壌層Ⅰの上面で検出した遺構である。灰黄色系と暗灰色系を埋土とする遺構との２種類が認められ、前者を第１面(1)、後者を第１面(2)として遺構を検出した。

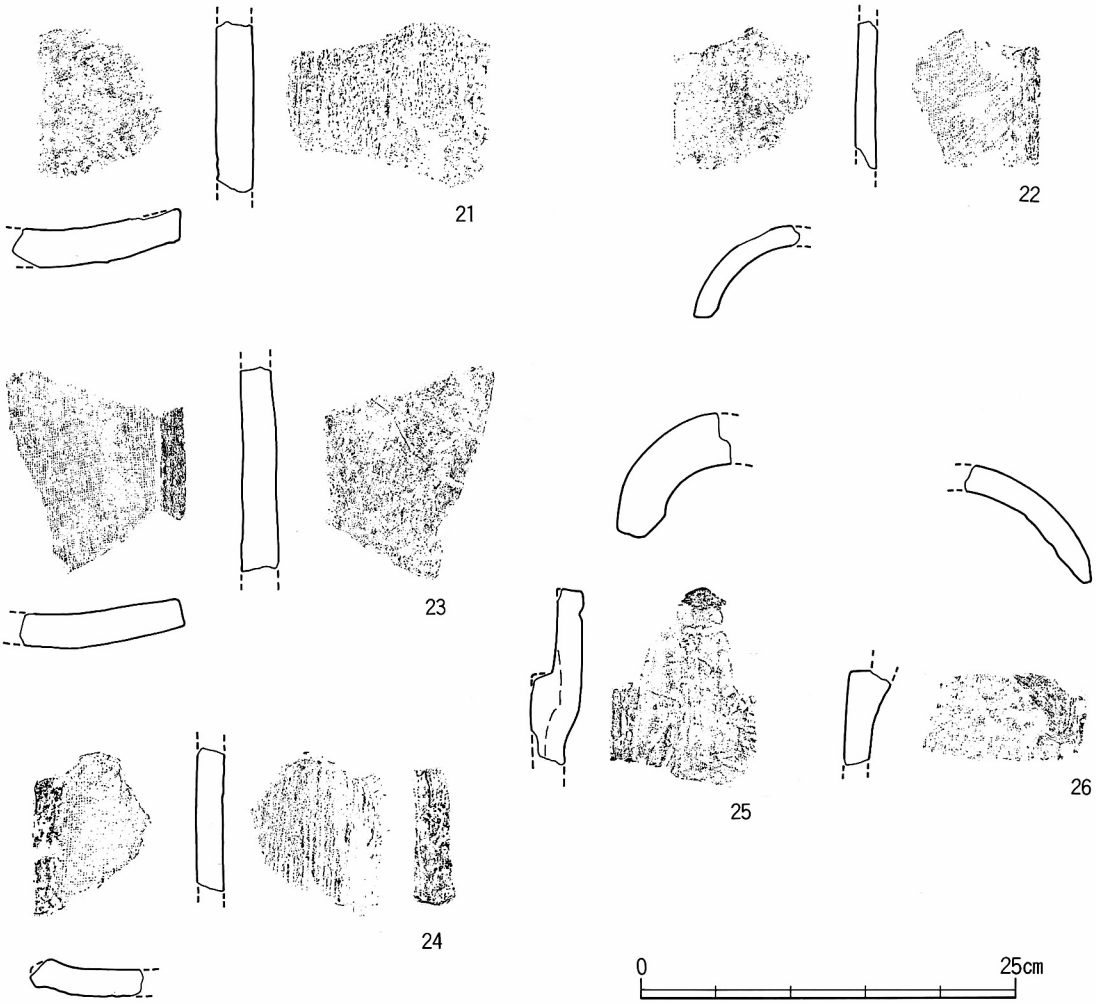
第１面(1)で検出した遺構は、鋤溝と用水路の上層（SD16上層）に限られる。鋤溝については時期を特定できないが、Ⅰ区・Ⅱ区で検出した鋤溝とほぼ同様の時期と考えられる。用水路の上層については、近世以降と考えられる。

第１面(2)では、掘立柱建物跡・溝・畠跡を検出している。掘立柱建物跡と畠跡については、前項で土壌層Ⅰが一段高くなっていると報告した範囲で検出され、逆に一段低くなっている箇所では溝と掘立柱建物跡を検出した。

これらの遺構は、土器を伴うものに関しては、



第57図　Ⅲ区第１面(2)出土土器

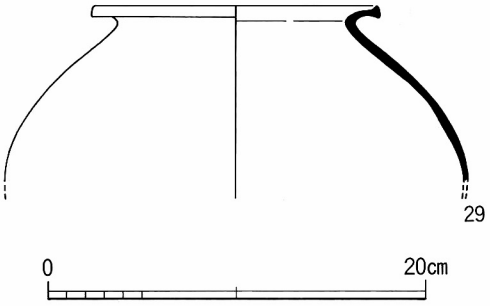


第58図　Ⅲ区第１面(2)出土瓦

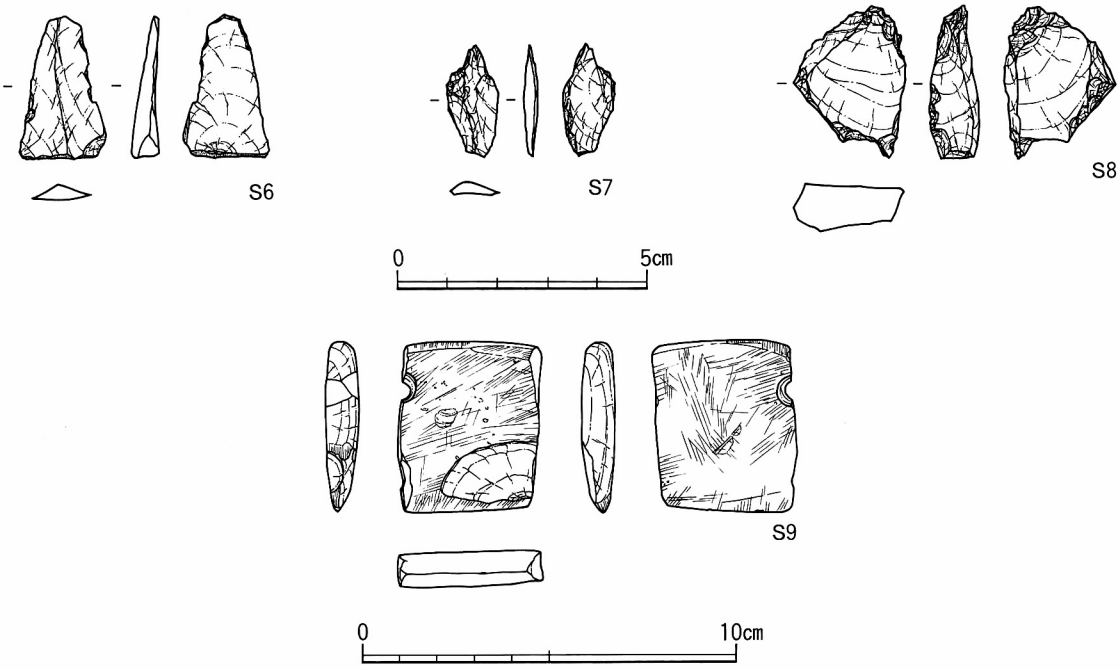
平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に位置付けられる。瓦（第58図）についてもほぼ同様の時期が考えられる。ただし、当遺構面を検出するにあたって出土した遺物（第57図）をみると、上記の時期の土器はもちろんのこと、奈良時代の土器も少なからず出土していることから、遺物を伴わない遺構については、当該期まで遡る可能性も考えられる。

第２面　土壌層Ⅰの下面、つまり土壌層Ⅰを掘削し、土壌化の認められないにぶい黄褐色あるいは黄橙色シルト質極細砂上面で検出している。柱穴・土坑・溝を検出している。

土器を伴う遺構に関しては、いずれも弥生時代前期～後期の遺構である。土壌層Ⅰを掘り下げ第２面を検出する際に出土した土器についても、弥生時代前期と中期のものが出土しており、上記の時期に合致するものである。



第59図　Ⅲ区第２面出土土器



第60図　Ⅲ区第２面出土石器

また、SD48については、幅11ｍ・深さ2.10ｍと調査で検出した溝状遺構のなかで突出した規模を測り、当遺跡を取り囲む環濠として機能していたものと考えられる。

第３面　土壌層Ⅱの上面と下面で検出した遺構である。前述したように、第２面で検出したSD48を境に当土壌層にレベル差が認められたが、一段低い南側は水田土壌となっており、この上面で水田跡を検出している。逆に、一段高い北側についてはその下面で柱穴・木棺墓・土坑を検出している。土坑内から弥生時代前期の遺物が出土しているため、他の遺構についてもほぼ同じ時期と考えられる。また、水田跡についても、Ⅰ区・Ⅱ区第３面で検出した水田跡に続くことから、弥生時代前期と考えられる。

第４面　土壌層Ⅲの上面で検出している。Ⅰ区・Ⅱ区第４面から続く水田跡を検出している。